

# 中村順平「スケッチブック」に描かれたキリスト教会建築について

酒井一光

## はじめに

大阪歴史博物館が所蔵する中村順平「スケッチブック」は、平成18年度に檜の会（代表：松本陽一氏）より寄贈されたもので、1～4までの4冊分からなり、それらは各用紙が切り離された状態で伝来した。これらのスケッチのうち、主要なものは『大阪歴史博物館 館蔵資料集5 建築家中村順平資料』<sup>1)</sup>にて紹介した。しかし、個別のスケッチが何を描いたものであるかについては、いまだ不明な点が多い。

中村順平はこれまで建築教育者として高く評価され、また『建築という芸術』等の著書を通して建築を芸術の一分野であることを浸透させようと生涯をささげた者として知られてきた<sup>2)</sup>。その反面、彼は建築<sup>3)</sup>や船内装飾<sup>4)</sup>について多数の実作を生みだしながら、戦災等によって代表作が滅失し、壁面彫刻<sup>5)</sup>のほかは実作がほとんどない建築家として考えられる傾向があった。筆者はこれまで、中村の建築、船内装飾、壁面彫刻等の実作や計画案について調査してきた<sup>6)</sup>。その中で、戦後の現存する建築作品だけでも、横浜元町のクリフサイド、前橋八幡宮拝殿<sup>7)</sup>、東京都大田区のごんしょうじ厳正寺本堂・鐘楼門<sup>8)</sup>があることがわかったが、実現しなかった建築計画、滅失した建築作品を含めれば、さらに活動範囲は広がったと考えられ、従来の中村順平像だけではとらえきれないと思われる。

本「スケッチブック」は時代、描写内容とも広範にわたり、中村のその時々に関心や設計活動を敏感に反映していると考えられる。しかし、日付や描写対象に関するメモ書きはほとんどない。本研究では、中村順平「スケッチブック」の中からキリスト教会を描写したスケッチに焦点をあて、その描写を検討するとともに、プロジェクトの時期や具体的内容を解明することを目的とする。

## 1. スケッチブックの概要

当館が所蔵する中村順平「スケッチブック」のうち、キリスト教会に関するスケッチは「スケッチブック3」に納められている。「スケッチブック3」は31枚のスケッチ用紙とスケッチブック表紙からなり、裏表に隙間なく鉛筆スケッチが描かれている。このうち、キリスト教会を描写したものは14枚27頁分となる。

表紙は中央上手に「“HOLBEIN” CROQUI BOOK」の標題と右下に「TAKEO AMITO / 413-87 BENTENCHO SHINJYUKU-KU TOKYO / 102 JAPAN（朱印）」の黄色の貼紙があり、横浜高等工業学校建築学科における第一期生（昭和3年卒）で、檜の会初代会長であった網戸武夫が、中村の遺品を引き継いで所持していたもののひとつであることが分かる。

キリスト教会に関するスケッチが含まれているスケッチの全頁を、寄贈時の順序<sup>9)</sup>に従って、本論末尾の資料図版【fig.01】～【fig.27】に掲載した。なお、各スケッチに関しては、「2. キリ

スト教会関連スケッチの詳細検討」において考察する。

本スケッチブックの制作年代については明確な記載がないため分からないが、キリスト教会の直後に「群馬縣敷島綜合運動場」と記されたスケッチがあることから、これまで昭和 26 年（1951）以前と推定していた<sup>10)</sup>。

## 2. キリスト教会関連スケッチの詳細検討

ここでは、大阪歴史博物館が所蔵する中村順平「スケッチブック 3」の中から、キリスト教会に関連する場面について検討する。「2.1. 各スケッチの検討」において、頁ごとのスケッチ内容を分析し、「2.2. スケッチにみる設計過程と描き方の特徴」において設計過程や中村のスケッチの進め方・描き方の特徴について考察する。

### 2. 1. 各スケッチの検討

ここでは「スケッチブック 3」における 14 枚 27 頁にわたるキリスト教会のスケッチについて、本論考 31 頁以降に掲載した資料図版【fig.01】～【fig.27】の頁ごとに内容と描き方を分析する。

- ▶ **【fig.01】** 用紙を縦使いとして大きく 5 段を基調に、開口部まわりを中心にディテールを検討したスケッチを配する。この段階で既に、斜めの壁柱が主要なモチーフとして登場する【fig.01 部分図】。用紙右側には、必要に応じて断面スケッチを描き添えて検討を進める。
- ▶ **【fig.02】** 用紙を縦使いに大きく 5 段に分けてスケッチする。最上段はキリスト教会の開口部まわりや彫像スケッチ、2 段目は内部の斜めの壁柱、塔断面の螺旋階段【fig.02 部分図】を構想するスケッチ、3・4 段目は彫像など細部装飾のスケッチ、5 段目には断面図・側面図スケッチなどが描かれている。塔の位置は中央部のものと向かって右に寄せたものがあり、この時点では塔の位置が未定である。
- ▶ **【fig.03】** 用紙を横使いとして 3 段を基調に、1～2 段目に外壁開口部まわりのディテール、側面図や部分断面の検討、3 段目に透視図風スケッチや薔薇窓【fig.03 部分図】など細部の検討へと続く。全体に左側がくっきりとした線で、右下ほど曖昧で太い線が多い。
- ▶ **【fig.04】** 用紙を縦使いとして 5 段を基調に、開口部まわりを中心に検討を進めている。最上段では平面・断面の略スケッチを描き、2 段目以降で略断面と開口部まわりのスケッチを対比させながらアイデアを練りあげている。2 段目右の透視図風スケッチ【fig.04 部分図】には○が付され、建物全体で凹凸に富む構成が意識されはじめている。
- ▶ **【fig.05】** 用紙を横使いとして 3 段を基調とするが、用紙右手には断面図や部分図が多く、段数が更に細分化されている。3 段目には平面図【fig.05 部分図 1】と立面図が描かれ、一部アーチ形の開口部【fig.05 部分図 2】も検討される。薄い線でいく度か描きながら、最終的に濃く太い線で形を決め込もうとしている。
- ▶ **【fig.06】** 用紙を横使いとして 2 段（一部 3 段）を基調にスケッチを進めている。左手に主に側面図、右手に主に内部の開口部まわりのスケッチが描かれている。他の頁よりも鉛筆の線は太く濃く、不鮮明で、迷いがみられる。下段中央には椅子などのインテリアスケッチが登場する【fig.06 部分図】。
- ▶ **【fig.07】** 用紙を横使いに 3 段を基調としているが、3 段目は上 2 段に比べ極端に幅が狭く補足

的な印象は否めない。左上から2段目右側にかけて、側面開口部まわり、内部開口部まわり、アプスまわりと続き、3段目は主に簡易な断面スケッチが描かれる。アプス部分は天井が半円弧形のようにもみえるが、多角形状に近似させようとしている【fig.07部分図】ことから、【fig.05】3段目の平面図【fig.05部分図1】に対応したものであろう。

- ▶ **【fig.08】** 用紙を横使いとして4段を基調に、2段目が中心的な位置を占める。用紙右手に向かうほど、1段が更に細分化される。左上から立面・側面スケッチ、右手に進むと小さな平面・立面等が描かれる。3段目は左手から屋根まわり、開口部まわりのディテールが、4段目は屋根部分や開口部外まわり、側面図がスケッチされている。下半分は描写密度がやや低い。
- ▶ **【fig.09】** 用紙を横使いに3段を基調に描かれている。上段右手には塔屋断面の螺旋階段と思われるスケッチがあり、【fig.02】に続き塔と螺旋階段へのこだわりがみられる。中段右手では内部透視図風スケッチが中心を占める。下段では、左手から彫像を伴う袖廊側面出入口まわりの詳細【fig.09部分図】、側面・正面図などが描かれる。【fig.09部分図】における窓の細部や彫像などからは、中村が生涯影響を受けたアール・デコの余韻が感じられる。
- ▶ **【fig.10】** 用紙を横使いとして3段を基調に描かれ、正面ファサードの検討が中心テーマとなっている。上段はすべてファサード（主に左側半分）、中段は正面入口まわり、下段はその続きと屋根断面や彫像【fig.10部分図】のスケッチが検討される。
- ▶ **【fig.11】** 用紙を横使いとして2段を基調に描かれるが、他の頁にくらべ描写密度は薄い。上段は、ファサードの正面入口まわりを立面スケッチで、下段は斜めからみたパース風スケッチで検討する。また、彫像の配置や正面入口の庇の両端の見え方や反り上がり具合【fig.11部分図】などのスタディが続く。
- ▶ **【fig.12】** 用紙を横使いとして3段を基調に、上段は側面の開口部まわり、中段は側面や断面など、下段はさらに上・下にわかる形で小屋組や屋根が検討され、クリアストーリー外部が屋根窓状に描き込まれている【fig.12部分図】。
- ▶ **【fig.13】** 用紙を横使いとして3段を基調とするが、1段目は幅が極端に狭く小さな断面や窓まわりのスケッチなどが後から付加的に描写されたとみられる。2段目は開口部まわりを中心とした側面透視図風スケッチが描かれる。3段目は部分詳細、架構を中心とした断面、側面開口部まわりを斜め横からみた詳細スケッチなどが描かれる。断面には天井付近から吊られたシャンデリア【fig.13部分図】もみられる。また右下図では、側面の開口部まわりの凹凸あるファサードが大きな見せ場となっている。
- ▶ **【fig.14】** 用紙を横使いとして2段を基調に、上段には妻面の図が描かれ、十字架の詳細スケッチ（キリストの磔刑像を含む）も添えられる。ごく緩やかなドーム状の屋根【fig.14部分図】も見られる。身廊屋根上の小ドームであろうか。下段は正面玄関から側面にかけての鳥瞰図風スケッチで、本頁全体で大きな比重を占める。上方からの視点によって、建築がかなり凹凸に富み、段々状に積み上がりながら構成されていく様が強調される。塔の位置は、中央の案で決まるとみられる。全体にオーギュスト・ペレの傑作、ル・ランシーのノートルダム教会を彷彿とさせる。
- ▶ **【fig.15】** 用紙を横使いとして2段を基調とするが、上段は2／3程度のスペースを取り、内部の透視図風スケッチが中心を占める。壁面やアプス付近にくらべ、天井はまだ十分まとまっていない。下段は、外部の上部付近に彫像などを配したスケッチが描かれる【fig.15部分図】。
- ▶ **【fig.16】** 用紙を横使いとして2段を基調に、下段に重点がおかれている。上段は、外部開口部

まわりを検討し、下段左手には開口部の立面スケッチを、同右手には側面開口部まわりを斜めから見た様子を大きく描く。線の決定に迷いがあるためか、何度もなぞり、こすつたとみられる跡がある。

- ▶ **【fig.17】** 用紙を横使いとして紙面を広くとり、塔を中心としたスケッチを主体に描く。左端に小さく部分立面が縦に2点ならび、その右隣に塔の立断面、さらに右に塔の立面、右端に塔の透視図風スケッチが描かれている。行きつ戻りつしながら、左から順に描き進んだと思われ、右端の透視図風スケッチが最も完成度が高い。各塔のスケッチの間には、全体の立面スタディや細部スケッチ、必要図面名の書き込みがある【fig.17部分図】。全般に、描線には自信がみられ、ボザール留学時代の課題「塔のスケッチ（鐘楼三つ）」<sup>11)</sup>を彷彿とさせる。
- ▶ **【fig.18】** 用紙を横使いとして、側面透視図風スケッチを中心に描き、周囲に楯飾りなどの細部意匠スケッチを配する。側面透視図風スケッチでは、水平・垂直線を中心に構成される凹凸により、変化に富んだ外観の様子がうかがえる。外部を歩く人の姿もみえ、透視図下絵のような雰囲気である【fig.18部分図】。
- ▶ **【fig.19】** 用紙を横使いとして2段を基調に、上段左端より右に向かって内部壁面のスケッチ、断面架構スケッチ、内部透視図スケッチなどが続く。内部透視図スケッチでは、小屋組を構成する梁のディテールや天井付近の意匠に関心が向いている。下段は左端より、略平面図【fig.19部分図】とアプス・袖廊・身廊・側廊まわりの外観、略断面等が描かれる。ここではアプス全体が曲面を描き、側面開口部まわりも簡略化され、設計方針が変更された可能性をうかがわせる。略平面図では、アプスの先に階段と小部屋が描かれている。
- ▶ **【fig.20】** 用紙を横使いとして2段を基調に、上段左端からアプス内観スケッチや天井付近のスケッチなどが、下段には平面スケッチや袖廊まわり外観スケッチ、内観透視スケッチが描かれる。アプス天井は再び、円形を多角形に近似させようと試みている。全般に他のスケッチより筆圧が薄く密度も疎らで、線の決め込みに至っていないとみられる。
- ▶ **【fig.21】** 用紙を横使いとして4～5段にわけ、細かいスケッチで紙面全体を埋め尽くす。描線は細く鋭い。全段を通して左手から切妻屋根の形状、内部の斜めの壁柱まわりの様子、略断面・略立面スケッチなどが続く。設計条件が変更され、ディテールが簡素化される中、斜めの壁柱とクリアストーリーのハイサイドライト【fig.21部分図】にこだわり、内部の見せ場にしようとしていた。右上の立面スケッチでは塔の位置が右サイドにあり、未だ塔の位置を逡巡している。
- ▶ **【fig.22】** 用紙を横使いとして3段を基調とするが、右手に進むと4段に細分化される。全体に左手に略平面をまとめた上で、上段は主にファサードの検討、中段は正面中心部の立面スケッチ、下段は切妻屋根まわりのスケッチなどが描かれる。ここでも設計条件が厳しくなる中、当初の凹凸に富んだ外観からいかに特徴的な細部を残そうか悩む様子がうかがえる。
- ▶ **【fig.23】** 用紙を横使いとして大きく縦に3分割する形で、左手には切妻屋根まわりの開口部スケッチ、中央上方には屋根窓のスケッチ【fig.23部分図】と同下方に正面ファサードのスケッチと内部斜めの壁柱のスケッチ、右手には各種略立面・略断面等が描かれる。【fig.22】に続き、ディテールの検討を深化させている様子がわかり、描線もより濃く、くっきりとしている。
- ▶ **【fig.24】** 用紙を横使いとして3段を基調に、上段に身廊・側廊・袖廊付近の透視図風スケッチとそのディテールを、中段に同じく側面の身廊・側廊・袖廊付近の透視図風スケッチとファサードスケッチを大きく描き、下段に略立面等のスケッチを小さく配する。中段左手のスケッチが中

心を占め、屋根は急勾配で、袖廊屋根は身廊より一段屋根が低く、袖廊側面に出入口があることが読みとれる【fig.24 部分図】。描線は全体に【fig.23】より薄く、弱い。

- ▶ **【fig.25】** 用紙を横使いとして2段を基調に、外観の部分透視図スケッチを左上・右上・右下に、左下に細部スケッチを配する。左上のスケッチが最も輪郭線が濃くはっきりしている。いずれも、開口部まわりの柱形を強調して垂直性を出すことにより、限られた条件の中で教会らしさを生みだそうとしている。袖廊部分【fig.25 部分図】は、【fig.24】にくらべ洗練度を増している。
- ▶ **【fig.26】** 用紙を横使いとして、左上と右上に立面スケッチを、中央右寄りに大きくくっきりと外観透視図スケッチを、その周囲に略平面などの検討スケッチを描く。一度簡略化を経て、再度当初案に近づけるかのように、凹凸に富んだ外観を切妻屋根の重ね合わせで実現させようとする様うかがえる。左上の立面スケッチでは塔頂部付近に特徴がみられる【fig.26 部分図】。外観透視図スケッチにくらべ、立面スケッチの方が塔に存在感がある。
- ▶ **【fig.27】** 用紙を横使いとして4段を基調に、1、2段目に立面、断面透視図スケッチ、屋根まわりの細部スケッチを、3段目に袖廊・身廊部分の透視図風スケッチを、下段に階段や内部の壁柱のスケッチなどを配する。塔にのぼる階段の比較的詳細なスケッチ【fig.27 部分図】は初出である。描線がくっきりと明快であり、内部に張りだす壁柱の存在が際立ち、4段目中程に壁面彫刻か壁画のような描き込みがみられる。

## 2.2. スケッチにみる設計過程と描き方の特徴

「2.1. 各スケッチの検討」でみた中村順平「スケッチブック3」におけるキリスト教会の設計過程と描き方の特徴について、次のことが読みとれる。

### (1) 設計過程について

#### ①全体を通して

中村はまず、外観の設計を固めるため細部スケッチを重ね、内部を随時検討していった。【fig.01～18】は、一連の設計条件のもとに進められたと考えられる。途中、工費などの条件が変わり、【fig.19】あたりから【fig.27】までが設計見直し後のスケッチではないかと推測されるが、その境目は明確ではなく読みとりづらい。ただ、後者がより制約が厳しく、細部装飾にこだわりたい中村がディテールを簡素化し、幾何学的な構成に傾いていった様うかがえる。【fig.14】からは、オーギュスト・ペレの傑作であるル・ランシーのノートルダム教会のようなデザインが追及されていたことがうかがえ、【fig.26】でもその雰囲気を残そうと試行錯誤している様うかがえる。

残されたスケッチは、開口部まわりのスケッチからはじまる。そのため、最初のスケッチがどのような状態からスタートしたか不明であるが、本建築が身廊・側廊部分の両側の開口部を幅・高さとも大きくとり、内部の斜めの壁柱、外部の垂直の壁柱を構造・意匠の中心に据えようとした姿勢が当初よりうかがえる。これらの壁柱は、木造により建設しようとしていたことを暗示している。時代的制約としても、木造の可能性が高かったと思われる。【fig.19】では、壁柱を強調した平面図が描き添えられるなど、平面・立面・断面を絶えず意識しながら壁柱まわりを検討していた。

【fig.19】は最下段にアールを描くアプス部分が描かれ、ここから大規模な修正が行われた可能性が考えられる。開口部の形状・意匠もだいぶ単純化され、何らかの予算等の制約があったことをうかがわせる。また、一度中央部に決めた塔の位置を、【fig.21・22】で再度右側に寄せるなど逡巡がみられる。さらに、【fig.24・25】で極度に単純化しながら、【fig.26】ではなんとか凹凸ある

正面外観の構成を残そうとしたことがわかる。ディテールを極限まで単純化させたため、窓まわりの内外の壁柱がこの建築の特徴的な部分として最後まで残された。

## ②外観

外観全体の構成では、中村が最も心血を注いで設計したと考えられ、さまざまなディテールの検討の末に【fig.14】左下において全体のヴォリューム感がうかがえるスケッチが一旦示された。外観が凹凸による変化に富み、上昇性を感じさせる建築を志向していた。ル・ランシーのノートルダム教会は鉄筋コンクリート造だが、本建築を木造で実現するのは困難が予想される。塔は【fig.02】で早くから登場し、【fig.17】では詳細が検討され、強いこだわりがうかがえる。

また、身廊上部のクリアストーリーは、外観上は屋根窓の形態と対応させ、壁柱と屋根窓によって変化に富む外観を生みだそうとしていた。開口部の形状は、縦長のプロポーションで垂直性を強調しようとした姿勢がうかがえる。【fig.12】では、屋根窓の形状を架構とともに俯瞰的に描き、検討している。【fig.13】右下のスケッチでは、開口部の外観がかなりの完成度で描かれている。

【fig.19】以降は、屋根まわりが至極単純化されたことに特色がある。厳しい設計条件でも、構想当初のような凹凸の変化に富んだ外観を作ろうと、極度に単純化した後で【fig.26】のような切妻造を反復させた屋根形状で多様性の実現を試みている。仮に木造金属板葺であれば、急勾配ながらこちらの案の方が安定しているとみられる。

## ③内部空間

内部空間の検討は、【fig.01】の構造体となる斜めの壁柱や垂直の壁柱が既に描かれている。更に【fig.07】にてアプスマわりのスケッチがあらわれる。【fig.09】において再度内部が描かれるが、その後暫くは外観中心となり、【fig.15】において内部が主要な関心事となったことがうかがえる。

【fig.19】以降は、外観同様単純化の傾向がみられる。窓まわりの細部【fig.24・25】は、意図的に棧などを省略し単純化したと思われる。斜めの壁柱なども、シンプルに存在が引き立つよう設計されている。中村の好みは、アール・デコの装飾を肯定するデザインだが、設計条件の制約上シンプルな造形に傾いていった様子が見られる。

## ④細部意匠

細部意匠やインテリアの構想は、スケッチ中でたびたび描かれた。とりわけ彫像については【fig.02】の初期段階から登場し、中村の関心の高さをうかがわせる。【fig.09・10・11・15・16】において彫像の配置がみられる。家具は【fig.06】で小さく登場する。【fig.18】では羊紋楯飾りなど細部装飾が描かれ、今後装飾も具体化しようとするところだったと思われるが、その後設計条件の変更があったと思われる。

【fig.19】以降は、こだわりのある彫像などはほぼ影を潜め、面と線による構成を中心に幾何学的な形態を追求したように見受けられる。【fig.19】にみられる天井に露出した梁状部分に描かれたものははっきりとしないが、欄間状装飾である可能性も考えられる。【fig.27】では、壁柱に壁画状の描き込みがあらわれるなど、今後実現可能な細部装飾を深化させようとしていたとも読み取れるが、スケッチはここで終了する。

## (2) スケッチの描き方の特徴について

スケッチ全体として、裏表ともほぼ余白なく描かれ、具体的なプロジェクト名や日付を示す書き込みはない。用紙の使い方は、縦使いにしたものが27点中3点あるほかは横使いで、いずれの場

合も用紙全体にスケッチを描くのではなく、おおよそ2～5段に分割して描く。おそらく多くの場合、左上から右手に向かって描き進め、2、3段目と順次下に描き進んだと推測される。場合によっては最上段や最下段、あるいは右端や左端の隙間に再度、平面、立面、断面の全体や一部を小さく描き添えながら検討を進めていた。

全般に薄い線で描きはじめ、複数回なぞりながら最後に明快な濃い線で形を決め込んでいったと推測される。構想がまとまりきらない頁では、描線は薄く曖昧なまま終わっている。中村が40～50代頃のスケッチ<sup>12)</sup>のくっきりと力のある描線と比べると、やや弱さが目立つ。

中村は戦後、薄肉彫刻なども手がけ、建築装飾に関心が高かったことから、まだ全体像も十分確定しない頃から、彫像などのスケッチが随所にあらわれる。おそらく本案がより進めば、自ずと詳細な彫像や壁面彫刻、ガラスの装飾格子や楯飾りなどのスケッチが次々と登場したであろう。

### 2.3. 小結

ここでは14枚27頁にわたるキリスト教会のスケッチについて、頁ごとに内容・設計過程や描き方の分析を行った。

設計過程では、まず外観の構成に関心があったとみられる。斜めの壁柱を用いた木造を主体構造として構想しながら、オーギュスト・ペレの代表作である鉄筋コンクリート造のル・ランシーのノートルダム教会のような凹凸に富んだ建築構成をめざしていたことが読みとれた。また、途中で設計条件の変更があり、より簡略化されたディテールに向かったことが分かった。

描き方の特徴としては、各頁とも2～5段に分けて中心テーマを描きながら、略平面・立面・断面スケッチやディテールの検討を小さく描き添えつつ、進めていた。線は、薄い線で何度も描き重ね、最終的な輪郭を決定する場合が多かった。全体像が完成しないうちから、中村の関心のあった彫像や装飾についてはたびたび描き込まれた。

## 3. 関連資料との比較検討

「スケッチブック」に掲載されたキリスト教会の建築について、中村順平の弟子でカトリック教会の建築を多く手がけていた市野昌が関わっていたと考えられる<sup>13)</sup>ことから、市野昌の創業した親建会工務所を継承した市野修氏の所蔵する資料調査を行った。「3.1. 市野修氏所蔵資料」ではその成果に基づき、「スケッチブック」との比較検討を行う。次いで「3.2. 大阪歴史博物館所蔵資料」においては、同所蔵資料について一連の「スケッチブック」および市野修氏所蔵資料との比較検討を行う。

### 3.1. 市野修氏所蔵資料

市野修氏が代表取締役を務める株式会社親建会建築工務所／親建会一級建築士事務所（以下、親建会工務所と記す）は昭和22年8月12日、市野修氏の父・市野昌によって創業されたカトリック施設を中心に住宅や建築全般の設計・施工を行う会社である。市野昌は、横浜高等工業学校における中村順平の教え子で、その関係から師である中村にキリスト教会の設計を依頼したと考えられる。市野修氏が所蔵する中村順平「スケッチブック」と関係する資料には、(1) 平面図青写真1葉、(2) 設計図白焼コピー3葉、(3) 書状白焼コピー1通・葉書白焼コピー4葉、以上3種類がある。

### (1) 平面図青写真について

本青写真1葉【fig.28】には、下部に「縮尺式百分之壱／平面図／設計者 中村順平」と書かれているが具体的なプロジェクト名は記されていないが、裏面に鉛筆書きで「育英聖堂」と書かれていた【fig.28 裏面】。これは東京都杉並区にあった育英工業高等専門学校の聖堂を指すと考えられる。同校はカトリック・サレジオ修道会の創立者ヨハネ・ボスコの教育理念に基づく学校で、現在サレジオ工業高等専門学校の名称となり、平成17年(2005)東京都小平市に移転した。市野昌が育英工業高等専門学校から依頼を受けたものを、中村に基本設計を依頼したと考えられる。本プロジェクトは実現には至らず、計画案で終わった<sup>14)</sup>。

平面図からは、全体に十字型平面で、外陣は身廊と側廊からなるバシリカ式をもとに、身廊の先には中央交差部、その左右に短い袖廊が取り付く。外陣の先には内陣があり、内陣の周囲には周歩廊が巡り、その先に「聖具」室が配されている。外陣手前には「玄関」があり、その右脇には「受附」と階段、左脇に「授洗」室がある。左右の袖廊にも「玄関」側に出入口が設けられている。本図面から寸法を読み取ると、外陣は袖廊を除き約30×16m、内陣奥行き約13m、両袖廊の両端までの幅約24mである。身廊・中央交差部・袖廊に配された椅子席は、全部で500席ある。

2.1. でみたスケッチと比較したとき、【fig.19～27】あたりが本平面図と合致しそうだが、相違点も多い。【fig.27】で描かれた階段も、本平面図と位置が一致するが形状は異なる。また、【fig.19 部分図】の「聖具」室に至る階段の位置が異なるほか、袖廊の出入口の位置が全てのスケッチと異なることから、【fig.01～27】以降の平面図案と考えられる。

### (2) 設計図白焼コピーについて

白焼コピーは平面図1葉と正面図・断面図1葉【fig.29】、正面図・側面図1葉【fig.30】がある。このうち、平面図は【fig.28】と同内容であるため図版掲載を略す。もともと【fig.29】と【fig.30】は連続する図面で、正面図は共通し【fig.30】の側面図は左半分が切れている。【fig.30】下部が一部切れているが「縮尺式百分之壱／杉並八成町教會設計図／設計者」と標題がある青写真からコピーしたと考えられ、もとは【fig.28】と一連のものだったのであろう。このことから、「育英聖堂」と「杉並八成町教會」は同一であることが分かる。

断面図【fig.29】には高さ関係の寸法が記され、それによれば身廊天井高「9m 70位」、側廊天井高「3m」、身廊外部の庇高(クリアストーリー下端まで)「9m 00」、身廊屋根高「13m 00」、塔の第一段目までの高さ「20m 00」と書き込まれている。また、塔の十字架天端まで約28m、塔先端部を除く鐘のある部分まで約24mとなっている(以上図面実測値)。

2.1. でみたスケッチと比較すると、【fig.17】のように塔が縦長のプロポーションではなく、【fig.26 部分図】の立面図に近い。【fig.23～26】では屋根勾配が急峻であるが、正面図・断面図ではより緩やかな勾配で、【fig.27】に近い。また【fig.29】の側廊の部分には「彫刻」と書き込みがあり、【fig.27】下段のスケッチと対応する。

### (3) 書状・葉書白焼コピーについて

書状白焼コピー1通【fig.31】、葉書白焼コピー4葉【fig.32～35】はいずれも、中村順平から「市野君」(市野昌)宛に送られたものと考えられる<sup>15)</sup>。いずれも白焼コピーのみ現存し、実物は所在不明である。【fig.31】は封書がなく、書状のみである。【fig.32～35】は1枚の白焼コピーにまとめられ、文面のみで宛名面はない。ここでは上2葉、下2葉で順不同に並べられた4葉の葉書の白焼コピーを掲載順(右上、左上、右下、左下の順)に紹介する。また、【fig.31】は「四月八日」



と記されているが年は記載がなく、葉書はいずれも年月日が不詳である。【fig.32・34・35】は本プロジェクトに直接関係がなく、制作年も前後するが、師弟関係を考える上で参考となると考え、ここでの考察対象とした。

### ①書状白焼コピー1通

【fig.31】は、本プロジェクトについての中村順平から「市野君」への進捗状況の説明や設計への希望、設計を進める上で逡巡する様子が親しげに述べられている。「軽石は横浜の貿易博覧会の彫刻に使用した」「軽石彫刻の効果は反町博覧会にて見るべし」という文言の中の「貿易博覧会」「反町博覧会」は、昭和24年（1949）3月15日～6月15日に横浜市野毛山会場と反町会場で開催された日本貿易博覧会を指している。中村はここでも薄肉彫刻を手がけており、「反町博覧会にて見るべし」という強い意志があらわれていることから、本手紙は博覧会会期中、昭和24年の「四月八日」と考えられる。

内容的に注目される箇所のひとつは、「構造は費用上木造とし、少なくとも五寸角材は使用する」といった記述から、木造でこの教会を設計しようとした点で、2.3.での考察とも合致する。本来は、ル・ランシーのノートルダム教会のように鉄筋コンクリート造が最適だと思われるが、「ヒウチや筋違ひ他を縦横無尽に繋いで控柱で振動を防ぐ考へだ」と苦心して木造で実現しようとする様子が読みとれる。スケッチにも頻繁に登場した木造による内部の斜めの壁柱は、親建会工務所が昭和28年に手がけたカトリック佐野教会聖堂や同29年のカトリック吉祥寺教会聖堂、カトリック彦根教会聖堂などとも共通点がある<sup>16)</sup>。

また、「transeptの入口上部は大窓があり、之はステンドグラスだらうが元来僕は此身廊天井一面に天井画を描きたい——之も僕が描きたい、現代の天地創造の絵をMichel-Augeに対抗して描きたいが之は夢だらう——」と記し、生涯尊敬していたミケランジェロのシステーナ礼拝堂天井画に対抗したものを制作したいという意欲に満ちている。建築だけでなく、天井画などの装飾を含めて、総合芸術としての建築を完成させたいとの思いが強く感じられる。

「鐘樓の軒高地上24m約80尺に迄下げた」との記載は、【fig.29】における塔の先端部を除く鐘のある部分まで地上から約24mという実測値に、誤差はあるが近い。塔の部分も木造であれば、悩んだ末の試みであっただろう。

「ウチドユにすると物事が楽だが之を避けるので厄介だ」と、ディテールに対する苦心が述べられている。内樋は、樋を屋根面内に納め、その存在を外から見えなくするもので、中村が厳正寺本堂などでも試みており、彼の得意とするディテールのひとつであった。後述の【fig.33】における「屋根葺瓦の材料種類が又これから研究問題となる」と対応した記述であろうか。

### ②葉書白焼コピー4葉

【fig.32】は、「歌舞伎座の切符有り難う。此月は吾が吉右エ門の追善興行なり」と書かれ、歌舞伎座で昭和30年9月4～28日に開催された「中村吉右衛門一周忌追善大歌舞伎」を指すと推定される<sup>17)</sup>。また「此頃は専らアトリエで国際建築の雑誌の原稿を書いている」とあることから、『国際建築』に「建築という芸術」を執筆していた昭和30年頃という記載とも一致する。キリスト教会建築設計後も、良好な師弟関係が続いていることをうかがわせる。

【fig.33】は、「杉並八成町教会第四案に対する見取図（略配景図の事）を描いた（中略）次に来てくれる時は第四案に関するplanとfaçadeの青写真を呉れ玉へ」とあり、本資料が「杉並八成町教会」のものであり、【fig.28】が一連のものであれば、本平面図が「第四案」となる。「市野君」

宛に送ったスケッチが、【fig.27】に続くものであったことも考えられるが、【fig.27】の裏面には群馬縣敷島綜合運動場のスケッチが続くことから、今後の検討が必要である。葉書作成年代は、【fig.31】と同じ昭和24年頃で、「水晩（四月）とは不在故」の記載から、【fig.31】より少し早い昭和24年3月以前と推定される。

【fig.34】は、「東劇切符有り難う。お陰で吉野川を観た」との記載から、東京劇場で昭和24年11月3～27日に開催された「妹背山婦女庭訓・大和吉野川」を含む公演を指したものであろう<sup>18)</sup>。本作では大判事を吉左衛門が、定高を時蔵が演じており、文面とも一致する。なお、本公演は東京劇場での最後の歌舞伎公演で、同劇場はその後、洋画ロードショー劇場となった。この頃は、「杉並八成町教会」の設計が中断せず、まだ続いていたかどうか、微妙な時期であろう。

【fig.35】は、「カブキ座切符送附あり。御影にて絶対に松の内では入手できない座席を得て」、「吉右エ門の芝居が見られた事は何より幸はせなり」、「有名な芝翫の八ツ橋花道で笑ふ所をよくみられた多謝々々」といった記載から、歌舞伎座で昭和26年1月5～29日の午後4時から開催された「籠釣瓶花街酔醒」を含む公演であろう<sup>19)</sup>。同演目の前には「華競歌舞伎誕生」があり、中村はこちらもみていただろう<sup>20)</sup>。なお、歌舞伎座は戦後この月の公演から復興を遂げ、再開した。

【fig.32～35】はそれぞれ時代が異なり、プロジェクトと直接関連あるものは【fig.33】のみだが、他の資料も芝居を通して中村と市野の親密な関係が長く続いていたことが読みとれる。

### 3.2. 大阪歴史博物館所蔵資料

大阪歴史博物館には、これまで検討してきた「スケッチブック」におけるキリスト教会の描写のほか、「杉並八成町教会」の正面図・断面図1葉、側面図1葉【fig.36】、書状白焼コピー1葉がある<sup>21)</sup>。このうち、正面図・断面図は【fig.29】と同一の図、書状白焼コピーは【fig.31】と同一のものであった。これらの資料についてはこれまで、その由来が分からなかったが、市野修氏所蔵の【fig.29・30】と一連のものであり、特に【fig.36】は【fig.30】の右半分で切れてしまった側面図の左半分を補うものである。【fig.36】の側面の窓は、ひとつ置きに高窓が並び、庇で区切られているものの、垂直に一続きのようにクリアストーリーの採光を兼ねる屋根窓となっている。「聖具」室も土蔵風に描写されている。「スケッチブック」の初期の窓形状にくらべ、だいぶ簡略化されたが、整理されたファサードとなっている。袖廊の窓は棧の配列にこだわった跡がみられる。

これら一連の図面・書状の白焼コピーは、市野昌より檜の会を通して網戸武夫の所有物となったものが、一連の中村順平資料とともに寄贈されたと推定される。

### 3.3. 小結

本章では、市野修氏所蔵資料と大阪歴史博物館所蔵資料の考察を行った。市野修氏所蔵資料の図面類は、「スケッチブック3」よりも後の案と考えられ、設計内容が詳細にうかがえるものだった。書状白焼コピーからは、「スケッチブック3」に描かれたキリスト教会は「杉並八成町教会」とも呼ばれた「育英聖堂」（育英工業高等専門学校聖堂）で、実現には至らなかった計画案であったこと、図面類の作成時期が昭和24年4月8日以前で、これまでの推定よりも遡ることが分かった。そのほかの葉書からは中村順平と市野昌の親密な関係が後々まで継続していたことがわかった。大阪歴史博物館所蔵品の中にもキリスト教会と関連した図面・書状の白焼コピーがあり、これらも「スケッチブック3」におけるキリスト教会や市野昌旧蔵資料と一連のもので、側面図白焼コピーは市

野修氏所蔵資料を補うものであることが明らかとなった。

## おわりに

本論では、大阪歴史博物館所蔵の中村順平「スケッチブック」の中からキリスト教会を描写したスケッチについて、関連資料を交えて次のとおり考察した。

「スケッチブック」は4冊あり、その中の「スケッチブック3」に14枚27頁分のキリスト教会のスケッチがある。

「スケッチブック」におけるキリスト教会の描き方をみると、完全な状態で初期案からすべてのスケッチが揃っているかは不明である。当該スケッチ27頁のうち24頁分のスケッチは、用紙を横使いとして縦に2～5段に分けて描いている。時に略平面・略断面を隅に添えながら、ファサードや透視図、ディテールのスケッチを描いていた。はじめは薄い線で何度もなぞりながら、決定した形は最後に力強いラインで描いている。形の迷いが残っているものは、薄い不明瞭な線で、描写密度が低いまま終わっていた。「スケッチブック」に描かれたキリスト教会は木造でありながら、オーギュスト・ペレが設計した鉄筋コンクリート造の傑作、ル・ランシーのノートルダム教会を想起させる凹凸に富んだ外観で、アール・デコの余韻を残すものでもあった。途中、設計条件の変更などがありながら、当初の方針を残そうと苦心した跡がみられた。

中村順平の弟子・市野昌が所持していた資料（現・市野修氏所蔵資料）には、中村とともに設計を進めていたキリスト教会の図面（平面図のみ青写真、他は白焼コピー）と中村からの書状・葉書の白焼コピーがある。これらによれば、「スケッチブック3」に描かれたキリスト教会は「育英聖堂」（育英工業高等専門学校聖堂で「杉並八成町教会」とも呼ばれた）で、実現には至らなかった計画案であることがわかった。図面類は、「スケッチブック3」よりも後の案と考えられる。書状からは、図面類の作成時期が昭和24年4月8日以前であることが分かり、これまでの推定よりも遡ることが分かった。そのほかの葉書からは中村と市野の親密な関係が後々まで継続していたことがわかった。大阪歴史博物館所蔵品の中にもキリスト教会と関連した図面・書状の白焼コピーがあり、これらも「スケッチブック3」におけるキリスト教会や市野昌旧蔵資料と一連のものであり、特に側面図白焼コピーは市野修氏所蔵資料を補うものであることが明らかとなった。

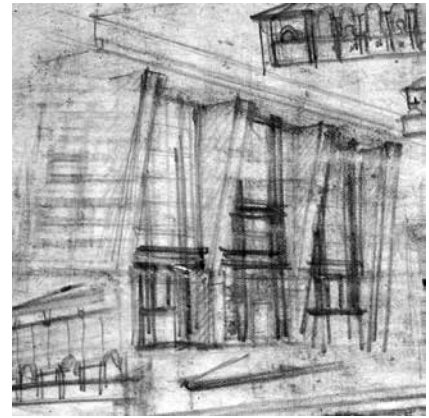
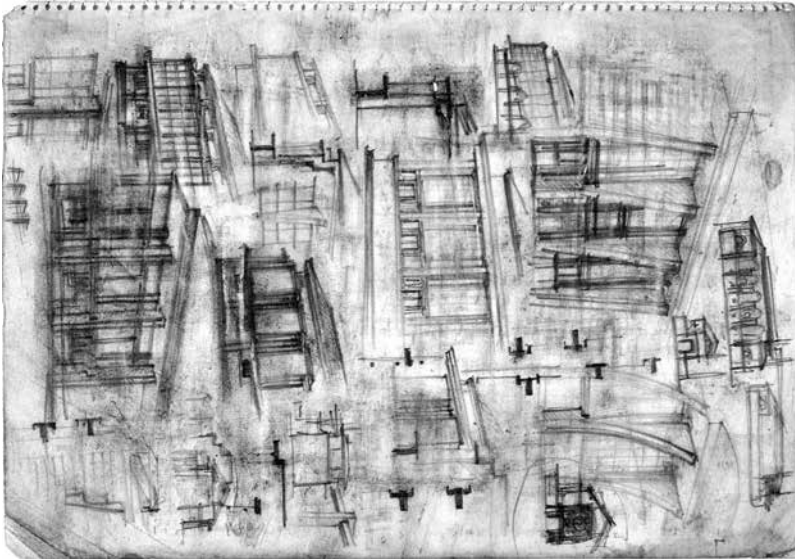
【謝辞】 末筆ながら、本研究にあたり快く資料を調査させていただきました市野修氏、およびご協力・ご助言を賜りましたみなさまに感謝申し上げます。

## ■註

- 1) 大阪歴史博物館編『大阪歴史博物館 館蔵資料集5 建築家中村順平資料』（同館、2009）46-81頁に図版、94頁に図版解説を掲載。なお、「スケッチブック」1～4の番号は、表紙単位で年代の古いものから並んでいた配列を尊重し、大阪歴史博物館での資料登録時に付したものである。
- 2) 中村順平の建築教育については、網戸武夫『情念の幾何学 形象の作家中村順平の生涯』（建築知識、1985）、林要次『近代日本におけるフランス建築理論と教育手法の受容 中村順平の理論と教育を中心として』（横浜国立大学大学院都市イノベーション学府、2015）をはじめとする林要次氏の一連の研究などがある。
- 3) 建築の代表作については岩崎家食堂・喫煙室などがあり、2)の網戸武夫前掲書などを参照。

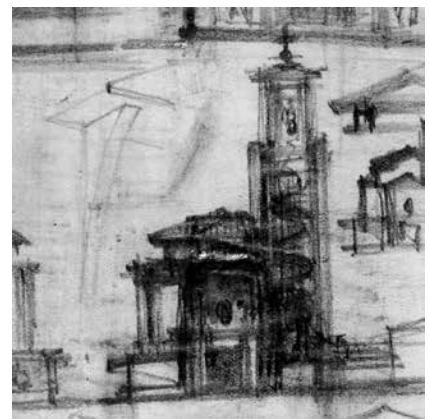
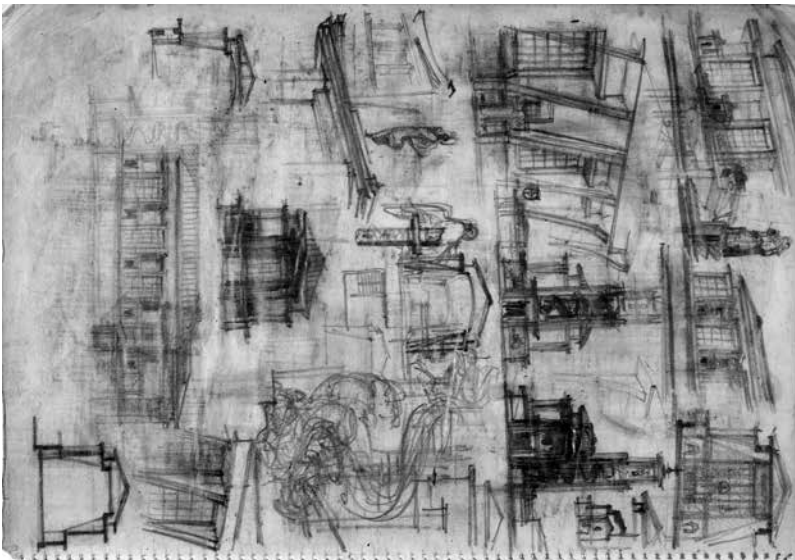
- 4) 船内装飾については、三菱重工業株式会社船舶技術部編『豪華客船インテリア画集』（アテネ書房、1986）、日本郵船歴史博物館図録『洋上のインテリア』（同館、2007）、同『洋上のインテリア 2』（同館、2011）、横浜みなと博物館図録『豪華客船インテリア画展』（同館、2010）、『にっぽんの客船 タイムトリップ』（INAX BOOKLET、2010）など多くの書籍・展覧会で紹介されている。
- 5) 壁面彫刻については2)の網戸武夫前掲書のほか、壁面彫刻保存の会編『中村順平作横浜銀行旧本店壁面彫刻の復元』（同会、2004）、吉田綱市『アール・デコの建築』（中公新書、2005）、同『図説アール・デコ建築』（河出書房新社、2010）、同『日本のアール・デコの建築家』（王国社、2016）、同『日本のアール・デコ建築物語』（王国社、2016）などを参照。
- 6) 拙稿「中村順平画「前橋八幡宮透視図」と実現した社殿について」『共同研究成果報告書 4』（同館、2010）39-54頁、拙稿「中村順平の設計した商店建築—Yukiya 洋裁店と尾上美粧院について—」『大阪歴史博物館研究紀要 11』（同館、2013）37-54頁、拙稿「建築家・中村順平の設計活動についての一考察」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系 53』（日本建築学会 2013）797-800頁。
- 7) 前橋八幡宮社殿については先行研究として、共同設計者による青木榮「未完の社 前橋八幡宮 顛末記」（『あすなろ』8、檜の会、2007）がある。
- 8) 厳正寺については先行研究として、共同設計者による吉原正「中村順平と厳正寺」（『あすなろ』8、檜の会、2007）がある。
- 9) 「スケッチブック 1、2、4」では、後に網戸武夫が付加したと推定される頁番号があるが、「スケッチブック 3」には頁番号がない。
- 10) 1) 前掲書 94 頁。
- 11) 1) 前掲書 6 頁参照。
- 12) 例えば、「スケッチブック 1、2」1) 前掲書、46-62 頁参照。
- 13) 林要次氏のご教示による。
- 14) 市野修氏のご教示による。
- 15) 積文作成には、豆谷浩之氏、八木滋氏の助言を得た。また適宜、ルビ、句読点を付加した。
- 16) 親建会工務所の公式ホームページ <http://www.shinkenkai.jp/archive/> 参照。とりわけ身廊と側廊のあるカトリック吉祥寺教会の斜め壁柱の扱いは、【fig.19・21・29】に描かれた斜め壁柱に類似する。
- 17) 『松竹百年史 演劇資料』（松竹株式会社、1996）484 頁。
- 18) 17) 前掲書、684 頁。
- 19) 17) 前掲書、474 頁。
- 20) 中村は後に、祇園会館の陶板壁画の原画を作成しており、その画題が歌舞伎誕生の場面であった（拙稿「祇園会館」『月刊タイル』2006年4月号、黒潮社）。著名なテーマであり、この時の観劇とは直接関係ないであろうが、こうした観劇の積み重ねの中から、なんらかのインスピレーションを得たかもしれない。
- 21) 平成 18 年度に檜の会（代表：松本陽一氏）より寄贈された「先生手稿（文、絵とも）印刷文」という網戸武夫によってまとめられたファイルに含まれていたもの。

■資料図版



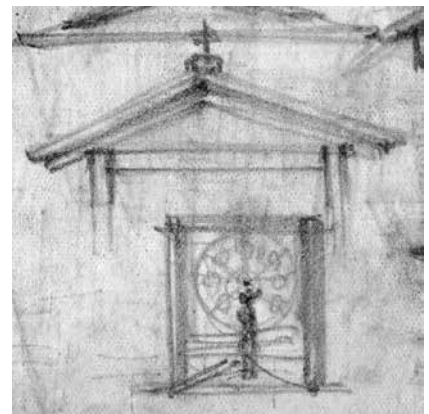
【fig.01 部分図】 斜めの壁柱

【fig.01】



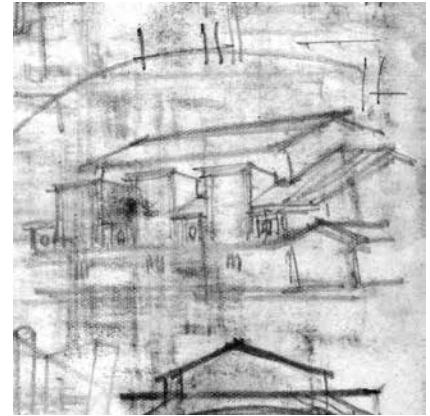
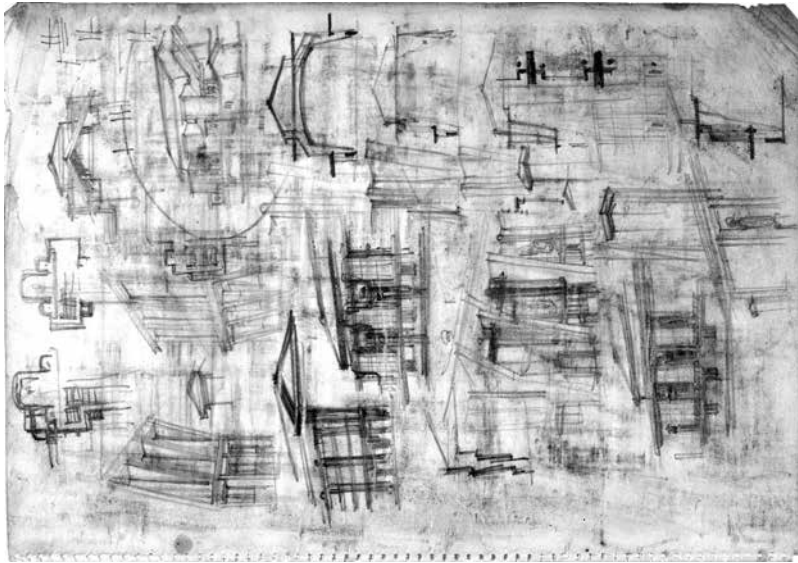
【fig.02 部分図】 螺旋階段のある  
断面スケッチ

【fig.02】



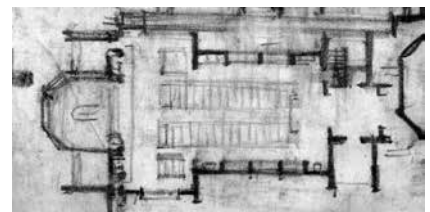
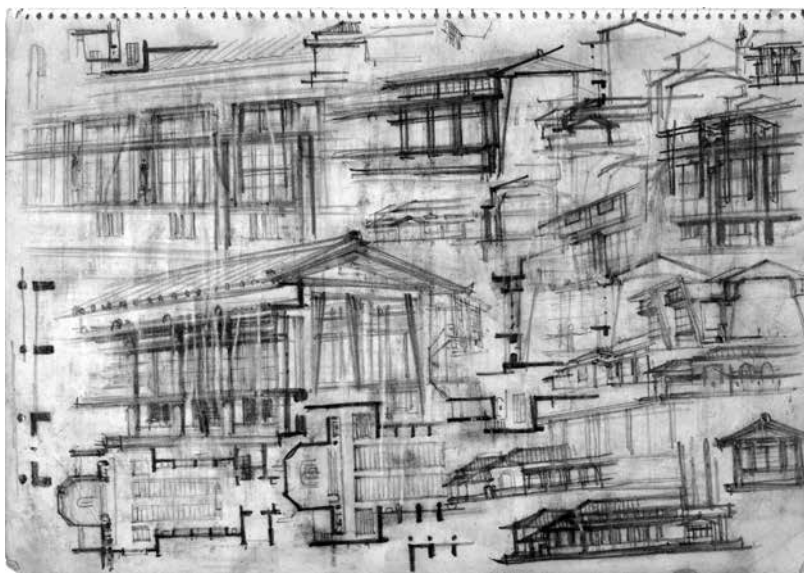
【fig.03 部分図】 薔薇窓

【fig.03】

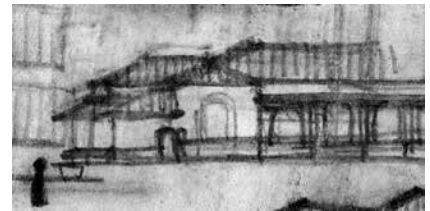


【fig.04 部分図】 透視図風スケッチ

【fig.04】

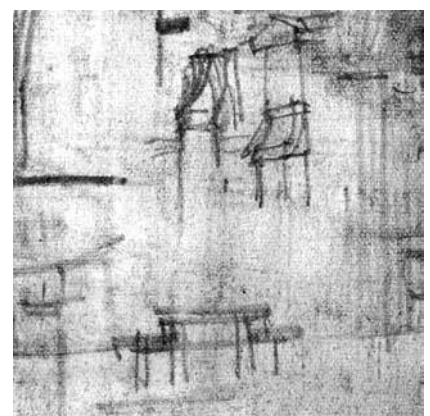


【fig.05 部分図 1】 平面図



【fig.05 部分図 2】 立面図のアーチ形開口部

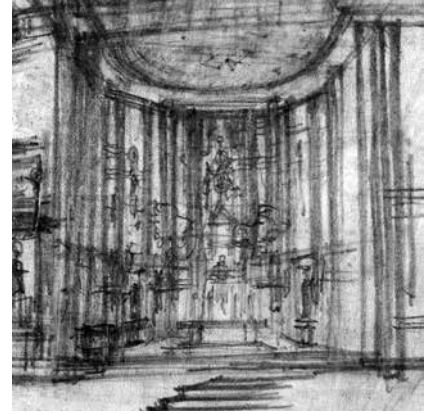
【fig.05】



【fig.06 部分図】 インテリア

【fig.06】



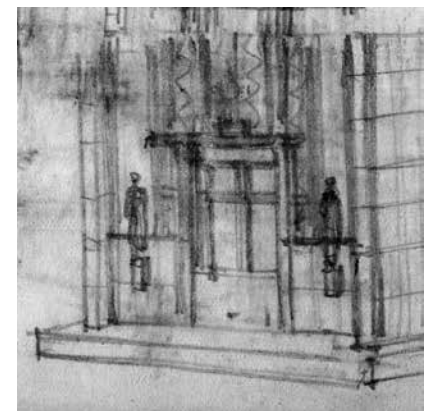


【fig.07 部分図】 アプスまわり

【fig.07】

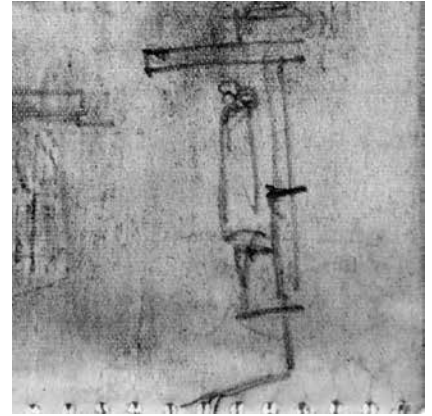
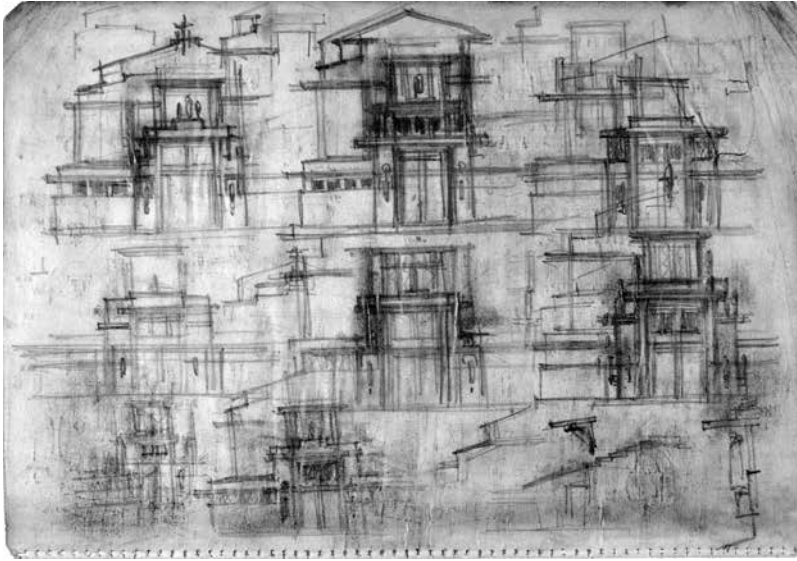


【fig.08】



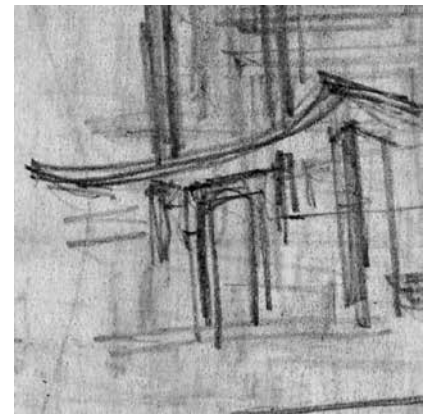
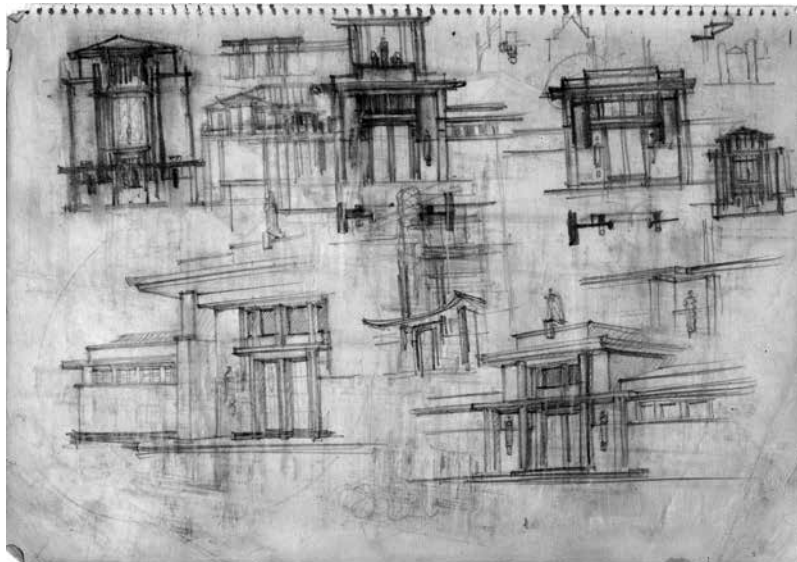
【fig.09 部分図】 袖廊開口部と両脇の彫像

【fig.09】



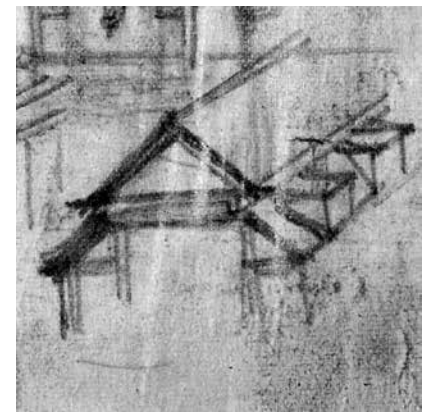
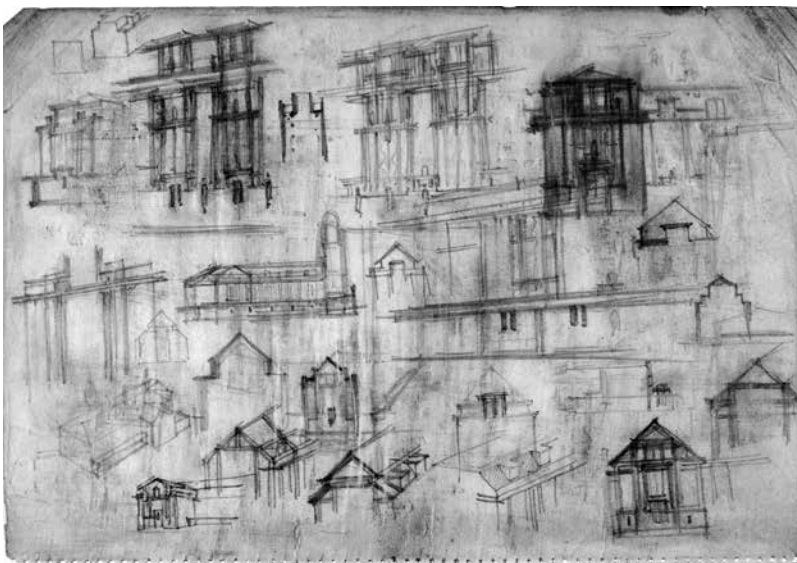
【fig.10 部分図】彫像

【fig.10】



【fig.11 部分図】底の反り上がり

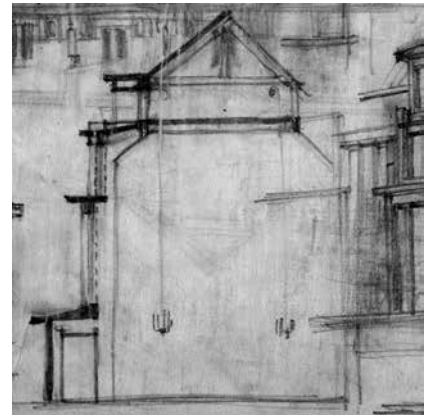
【fig.11】



【fig.12 部分図】屋根窓

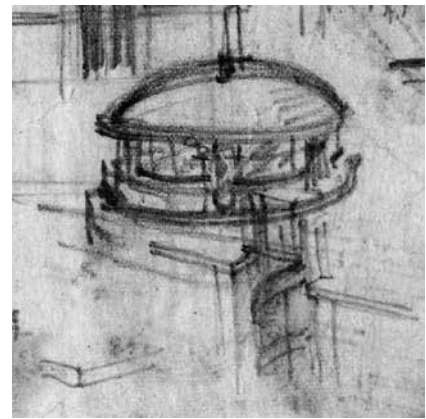
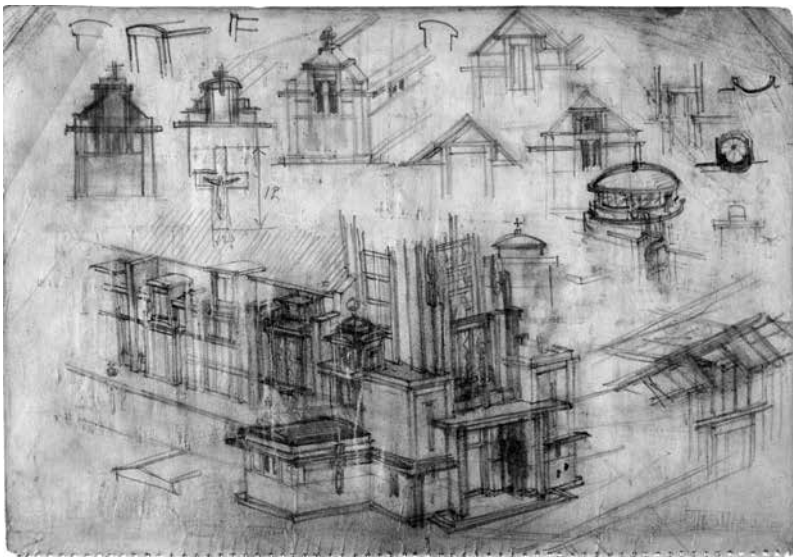
【fig.12】





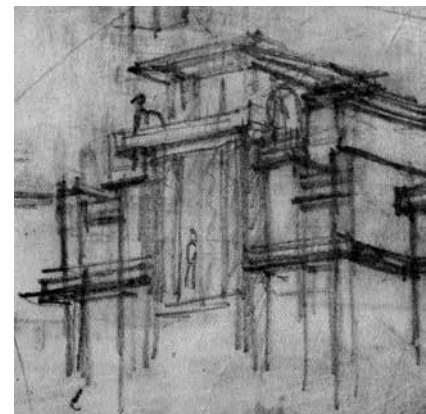
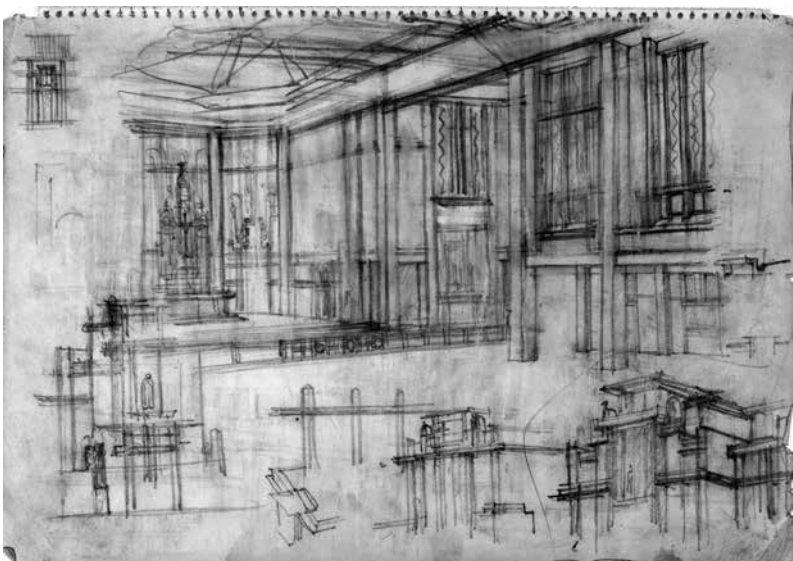
【fig.13 部分図】 断面スケッチと  
シャンデリア

【fig.13】



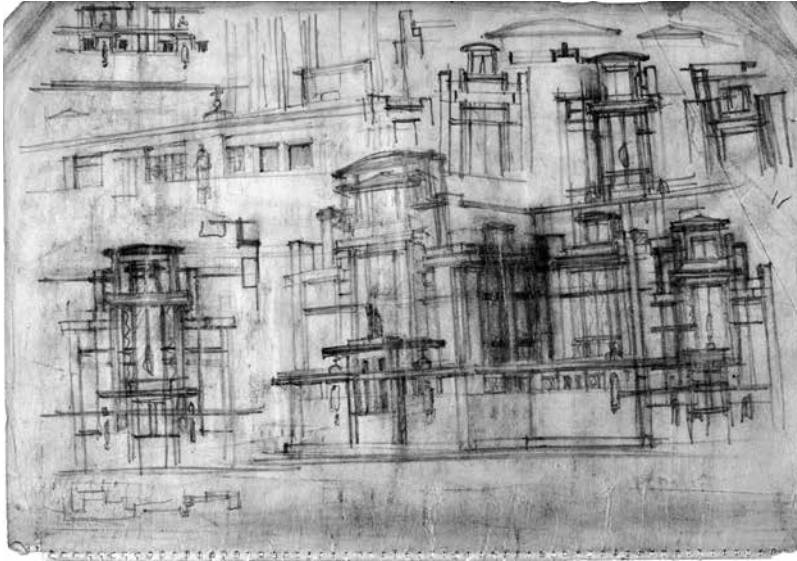
【fig.14 部分図】 ドーム状の屋根

【fig.14】

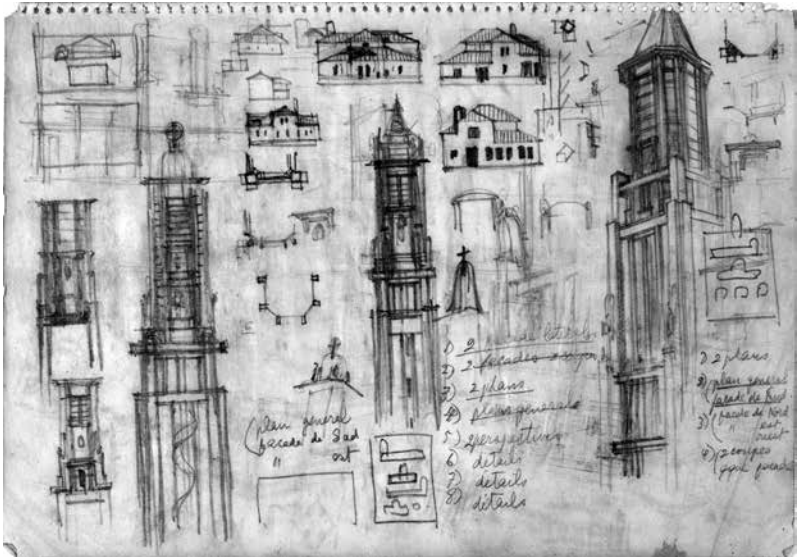


【fig.15 部分図】 外部底上の彫像

【fig.15】

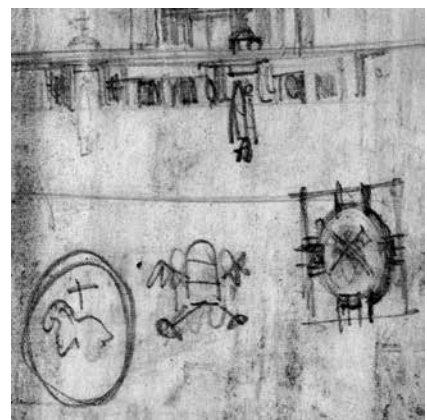
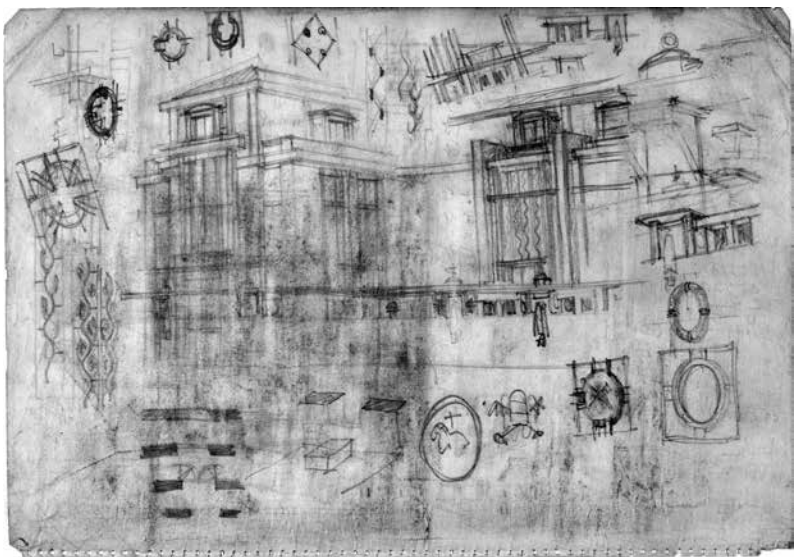


【fig.16】



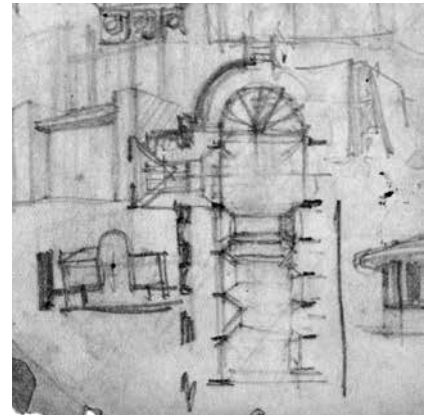
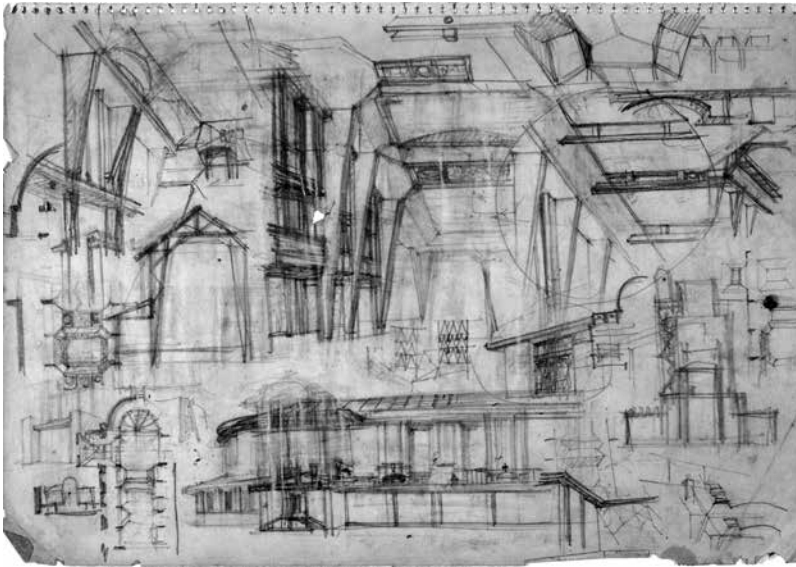
【fig.17 部分図】必要図面名の書き込み

【fig.17】



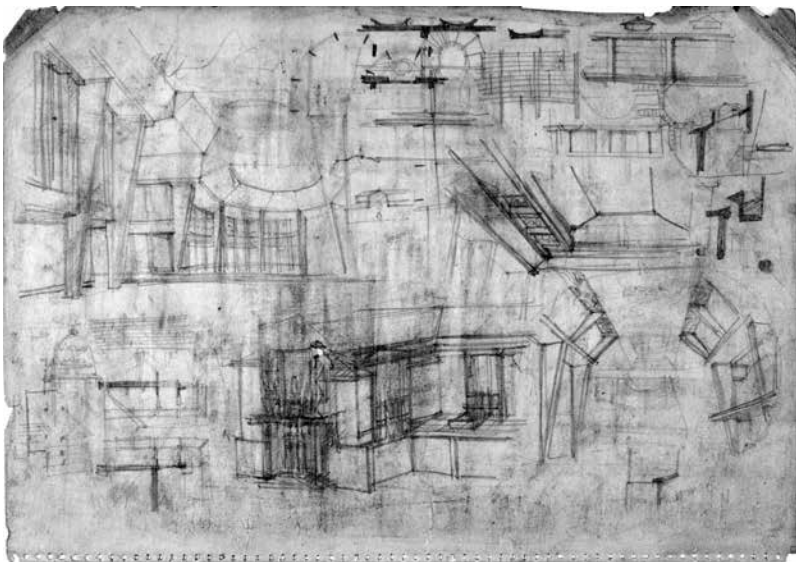
【fig.18 部分図】人物スケッチ(上)と楯飾り(下)

【fig.18】



【fig.19 部分図】 平面図  
アプス上部に小部屋

【fig.19】



【fig.20】



【fig.21 部分図】 斜めの壁柱と  
ハイサイドライト

【fig.21】



【fig.22】



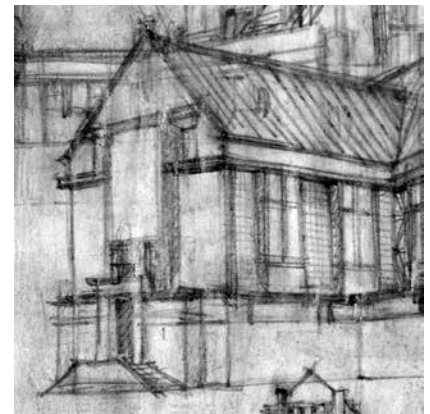
【fig.23 部分图】 屋檐窗



【fig.23】

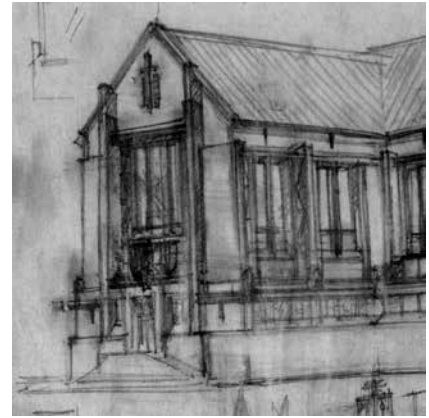


【fig.24 部分图】 袖廊部分



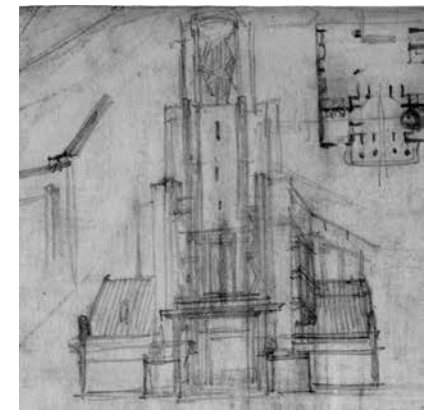
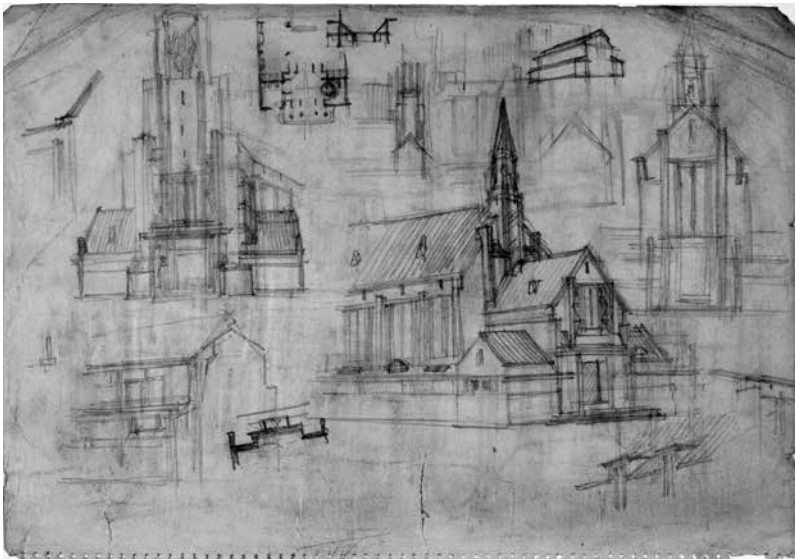
【fig.24】





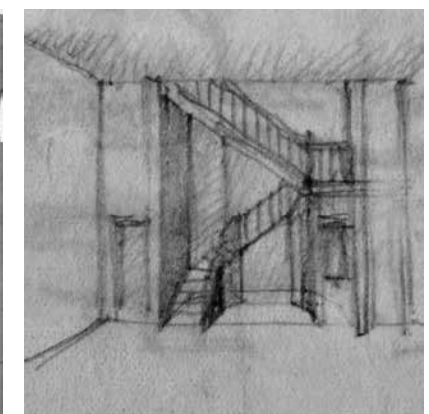
【fig.25 部分図】 袖廊部分

【fig.25】



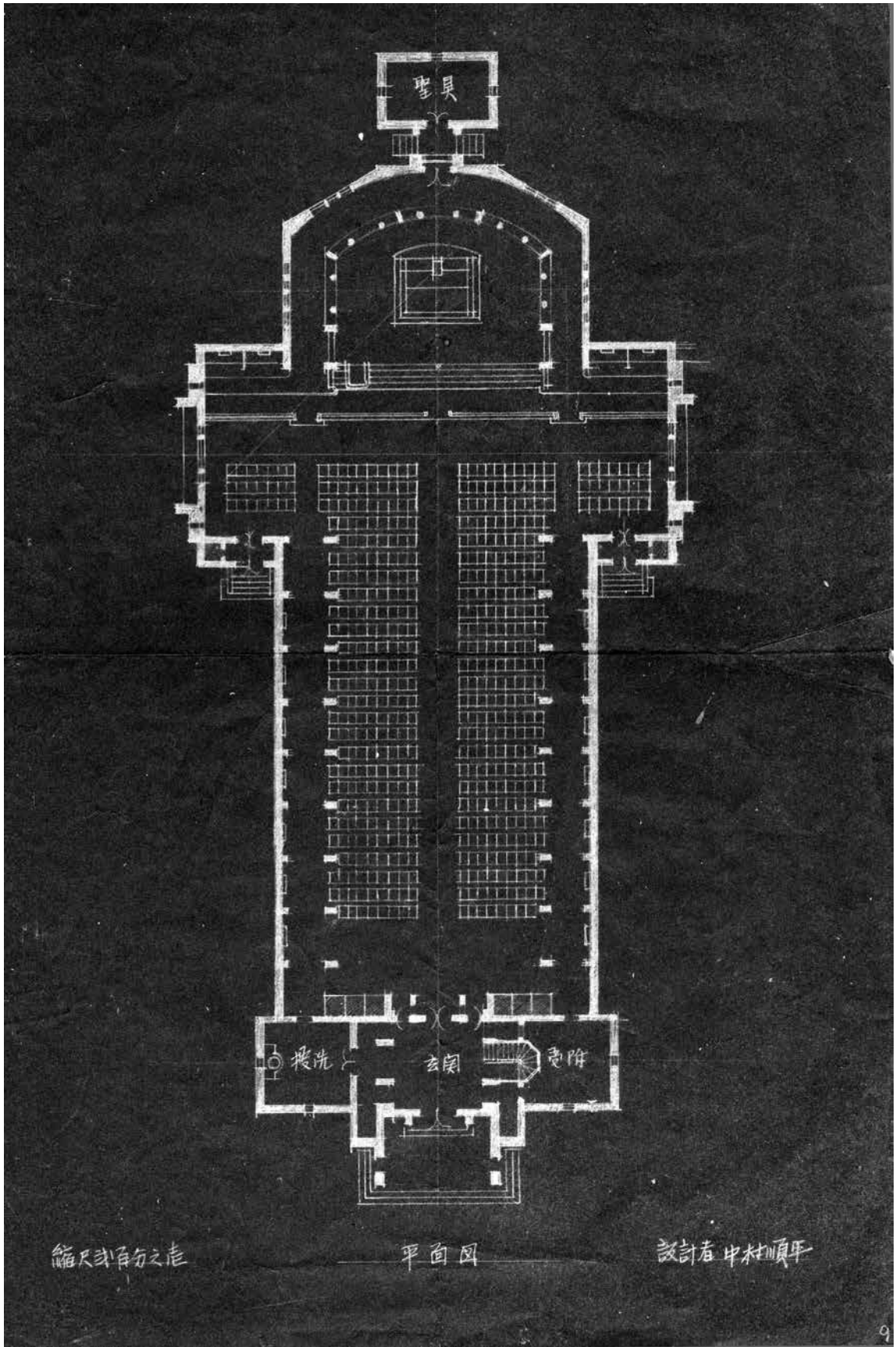
【fig.26 部分図】 立面スケッチ

【fig.26】



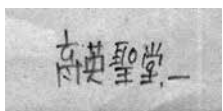
【fig.27 部分図】 階段スケッチ

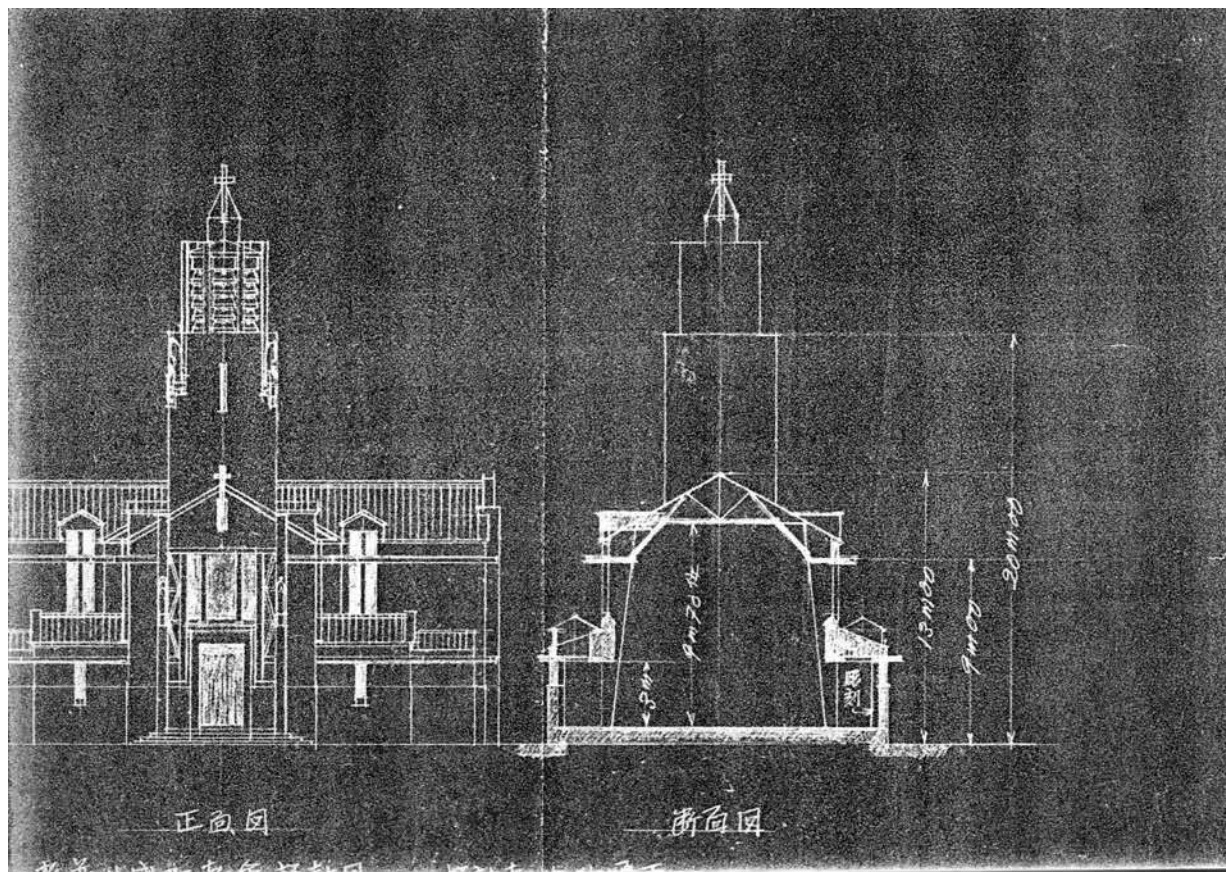
【fig.27】



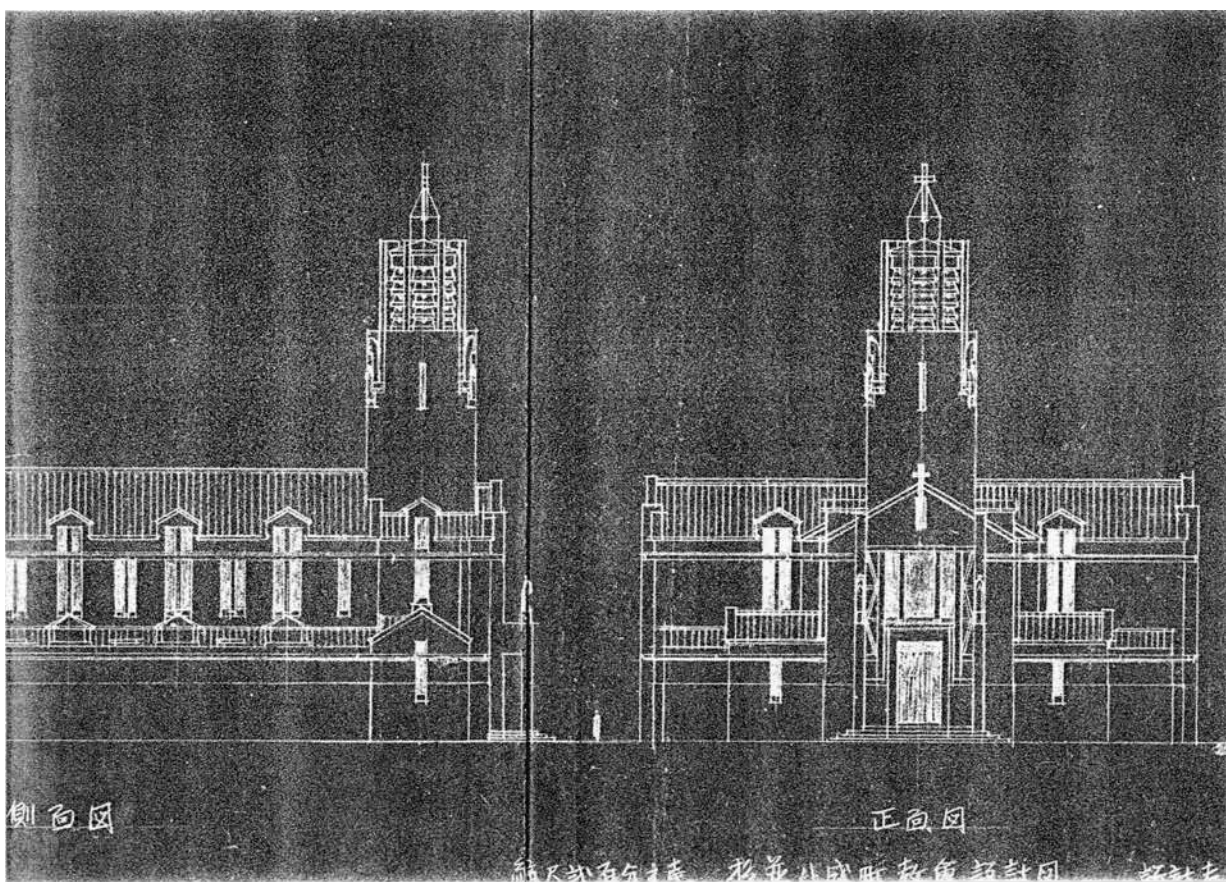
【fig.28】 平面图青写真

【fig.28 裏面】





【fig.29】 正面図・断面図 白焼コピー



【fig.30】 正面図・側面図 白焼コピー



市野君

先達は僕の子在中子来くれ失致/在 君が来くれ初めは勿論考へたが  
 比建築は此れ子固致と課取故キと早く出来ぬ 只今の比台地も中野車先  
 の是やないか余り永くなるの取あへず君が報告が次々だ先づ僕の基本的考へ  
 は構造は費用上木造にせよと互に構材は使用和出も僕の社会的予ひあるに  
 出来るか耐久的の材料は構材ない、と云ふ身廊は木造廊外壁の脚部は  
 出来るか石(オヤ石?)に積上り身廊の木造外部は木摺りト塗の上ハ  
 日かる石と表仕する即壁は全部は抹面にて並みの火災位は耐えらる様にする  
 根柢は石かセメント層か可なり、軽石は横長の製骨煉瓦の彫刻に使用し、最  
 早は何と待てたる結果は此石の外観は下交花崗石の様に治ないが耐火耐水—  
 兼踏む大丈夫と思ふ— 軽く取替む可ぬ故構造は心配ない、只引こ鐘  
 橋が女用と男用の苦心の差を以てする、今の心の中は鐘橋の軒居地上20mの  
 80尺に下下り、出来るか現代の引こ思つて身廊の軒居と高付ると比鐘橋  
 の柱がつかないで90尺位まで上かつて易く、梁は今直これは何れ他の予ひ  
 つく此の苦心の以てするが今の心の中は絶望の飛た、これに余り遠くなるの取  
 り聖堂の plan 2000を君が送つて plan の室の作りをさしめるが、比 plan は  
 根柢が曲角配の上の意、斜面の根柢の facade の分は、此場合境の地上  
 軒居 80尺に下りて讓歩して、此の木造輕石は今の懸橋部の南縁に本居  
 中央に柱をかけた即 plan の交際上部は鐘橋となる配置は (5m, 50角) 位で  
 や節連なりと縦横を盡く緊いむ柱の振動を防が考へた、座席は1信者位  
 90cm x 50cm の小し窮屈から 500人分は確保、後乃の座地は 40m<sup>2</sup>以上  
 故 5人 par metre とすれば 200人位と云ふ、堂地上部は tribune の唱歌隊の  
 立つ場所、神廊は七小間分つた左右14の鏡板を作り是は落内彫刻にて  
 切り欠の備置を表し上部の採光(電光線)にて落内と落の柱を照らす考へた比  
 と七小間分つた苦心は— 比落内彫刻は僕の生涯の記念物にて僕が全部  
 彫刻を固く描き終へしむと希つてゐる— 之は他の寺院には幾分例はある  
 然と思つて身廊の採光は上部の電光線にて十分照らす Transsept の入口上  
 部は大窓があり之はまたガラスのうらな来僕は比身廊天井一面天井画を描  
 たい— 之も僕が描たい、現作の天地創造の絵は Michel-Ange に対  
 抗して描きたい(之は落から)— 僕の plan は Hotel 附近は余り考へてゐる  
 大作の配置を弄し過ぎた亦正氣の結果は余り練つてゐるに神廊のイも疑  
 問なし比此の構造も尚且か断次石米(速刻)窓和の帯定と角室の向の抱  
 文をされたりは余り狭断の際入付るは尚且かと思つて即ち中野報告といふ訳  
 だ、後使つて比 plan 子座に外觀を造るが、比 plan 子に不都合があるか  
 余り内申出せ貰ふたい、中野君の申出る向致を考へてゐるが、一月は息  
 取らぬ、余り遠くなる僕が危れなるが、君が思はれるが、比此の— 才々

[fig.31-1] 書状 (中村順平→市野昌) 白焼コピー



市野君

先達では僕の不在中に来てくれて失礼した。君が来てくれた初めから勿論考えてみた。此建築は非常に困難な課題故キワとク早く出来ない。只今の此手紙も中間報告に過ぎないが、余り永くなるので取あへず君に報告する次第だ。先づ僕の基本的の考へは構造は費用上木造とし、少なくとも五寸角材は使用する。然も僕の記念的工事であるとして出来るだけ耐久的の材料で構築したい、そこで身廊は木造袖廊外壁の脚部は出来るだけ高イ石（オーヤ石？）で積上げ、身廊□の木造外部には木摺セメント壁の上バにかかる石を張付ける。即壁は全部石材表面として近所の火災位は耐えられる様にする。屋根は瓦かセメント瓦でも可なるべし。軽石は横浜の貿易博覧会の彫刻に使用した。効果如何を待つてみた結果は此石の外観は丁度花崗石の様に冷たいが耐火耐水——凍結にも大丈夫かと思ふ——軽く取付きが良好故構造は心配ない、只どうしても鐘楼が必要と思ったので苦心サンタンしてゐる。今の所やっと鐘楼の軒高地上 24m約 80 尺に迄下げた、出来るだけ現代的にしようと思つて身廊の軒高を高くすると此鐘楼の格好がつかなくて 90 尺位にまで上がってき易くて実は今日迄それで何も他の事に手がつかず此のみ苦心してゐるが今の所稍々絶望の形だ。それで余り遅くなるので取あへず聖堂の plan 1/200 を君に送つて plan の室のアタリをさぐる事にした。此 plan は屋根が曲勾配以上の急斜面の屋根の façade の分だ、此場合塔の高地上軒高 80 尺といふ所で譲歩してゐる。だが木造軽石ばかりで震振動の関係で、東面中央にもたせかけた即 plan の玄関上部が鐘楼となる配置だ（5m50 角）。ヒウチや筋違ひ他を縦横無尽に繋いで控柱で振動を防ぐ考へだ。座席は 1 信者宛 90 cm × 50 cm で少し窮屈だが 500 人分は確にある。後方の空地は 40 m<sup>2</sup>以上ある故、5 人 par metre とすれば 200 人は立てる、空地上部は tribune で唱歌隊の立つ場所だ。袖廊は□□間に分つて左右 14 の鏡板を作り、之は薄肉彫刻としてキリストの偉蹟を表はし、上部の採光（色光線）として薄肉を夢の様に照す考へだ。此を□□間にするので苦心した——此薄肉彫刻は僕の生涯の記念仕事として僕が全部彫刻原図を描き残したいと希つてゐるもの——之は他の寺院には多分実例はあるまいと思つてゐる。身廊の採光は上部の窓光源で之は十分明るい筈。transept の入口上部は大窓があり、之はステンドグラスだらうが元来僕は此身廊天井一面に天井画が描きたい——之も僕が描きたい、現代の天地創造の絵を Michel-Auge に対抗して描きたいが之は夢だらう——僕の plan は Autel 附近は余り未だ考へてゐない。大体の配置を示したに過ぎず道義的効果は未だ余り練つてゐない。袖廊のイスも難問だし此辺の構造も問題だが漸次研究を初める予定。とに角室は何の注文もされてゐないから余り独断で深入りするのは危険だと思つて、即ち中間報告という表現だ。後便にて此 plan に応じた外観を送るから、若し此 plan にして不都合があれば今の内から申出て貰ひたい。イヤな位むづかしい問題で考へてゐるだけで一ヶ月は過ぎてしまった。余り遅くなると僕が忘れてゐるかの様に思はれるので此辺で一寸ダ

診の形だ。凡そこんなむづかしい projet も少ない。結局木造であるから尚困難なのだが費用は容易なものとして何とか実現性に近づける事こそ大切だ。然し木造として耐久的構造とする事が骨子だ。只今では外観に立像が6ヶ全部にて取付いてあるがこれも軽石でカンソな手法でやる考へだから費用も施工も容易だ。軽石彫刻の効果は反町博覧会にて見るべし。ウチドユにすると物事が楽だが之を避けるので厄介だ。此 plan に付、面積の計算はしてゐない。唱歌隊の原画となるのは玄関上部だ。本物の清書は plan 1/200 地階 ~~tribune~~ } ----- / 枚

facade	{	正面	1/100	-----	/
		側面	1/100	-----	/
2 coupes		外観	1/100	-----	//
配景図		内部		-----	/

説明書

位の事か？ とに角、快心の作が出来ないでユーウツだよ！ ではとりあえず中間報告迄、以上の如し。

中村順平

四月八日

【fig.31-2】 書状（中村順平→市野昌）白焼コピー

診の形だ。凡そこんなむづかしい projet も少ない。結局木造であるから尚困難なのだが費用は容易なものとして何とか実現性に近づける事こそ大切だ。然し木造として耐久的構造とする事が骨子だ。只今では外観に立像が6ヶ全部にて取付いてあるがこれも軽石でカンソな手法でやる考へだから費用も施工も容易だ。軽石彫刻の効果は反町博覧会にて見るべし。ウチドユにすると物事が楽だが之を避けるので厄介だ。此 plan に付、面積の計算はしてゐない。唱歌隊の原画となるのは玄関上部だ。

本物の清書は plan 1/200 地階 ~~tribune~~ } ..... 1 枚

Façade	{	正面	1/100	.....	1
		側面	1/100	.....	1
2 coupes		外観	1/100	.....	1
配景図		内部		.....	1

説明書

位の事か？ とに角、快心の作が出来ないでユーウツだよ！ ではとりあえず中間報告迄、以上の如し。

中村順平

四月八日

秋らしくなつたので、仕事を精進の事、古履  
 歌舞伎座の切符有り難う。此月は吾が吉右工門の追善  
 興行なり。遊ぶには好適の季節。但し此頃は専らアト  
 リエで国際建築の雑誌の原稿を書いている。此春逋信  
 病院現場の田中のキモイリで僕の健康診断をして貰  
 った。結果は年齢相応の軽い動脈硬化で余り働きすぎら  
 れないという處で先は無事消光。

【fig.32】 葉書（中村順平→市野昌）1 白焼コピー

市野君—前略杉並八成町教会第四案に対す  
 る見取図（略配景図の事）を描いた。第四  
 案とは部分的に変更してマア追々少しづつ  
 良くなってゆく。図はカルク〜此間の配景  
 図と同じ大きさで描いたので郵送が出来な  
 いから君が序の時に便の者に取りに来てく  
 れ玉へ。元より之は急がない物かもしれぬ  
 が第四案の正面を少し変更した事を承知し  
 ておいて貰ひたい（学校側にて）。そして次  
 に来てくれる時は第四案に関する plan と  
 façade の青写真を呉れ玉へ」軽石は目下大  
 さと単価問合せ中その間に返事あるべし、  
 僕は日曜月曜と水曜（四月）とは不在故そ  
 のつもりであてくれ玉へ」屋根葺瓦の材料  
 種類が又これから研究問題となる。君の意  
 見如何？以上

【fig.33】 葉書（中村順平→市野昌）2 白焼コピー

市野君—前略杉並八成町教会第四案に対す  
 る見取図（略配景図の事）を描いた。第四  
 案とは部分的に変更してマア追々少しづつ  
 良くなってゆく。図はカルク〜此間の配景  
 図と同じ大きさで描いたので郵送が出来な  
 いから君が序の時に便の者に取りに来てく  
 れ玉へ。元より之は急がない物かもしれぬ  
 が第四案の正面を少し変更した事を承知し  
 ておいて貰ひたい（学校側にて）。そして次  
 に来てくれる時は第四案に関する plan と  
 façade の青写真を呉れ玉へ」軽石は目下大  
 さと単価問合せ中その間に返事あるべし、  
 僕は日曜月曜と水曜（四月）とは不在故そ  
 のつもりであてくれ玉へ」屋根葺瓦の材料  
 種類が又これから研究問題となる。君の意  
 見如何？以上

市野君—前略杉並八成町教会第四案に対す  
 る見取図（略配景図の事）を描いた。第四  
 案とは部分的に変更してマア追々少しづつ  
 良くなってゆく。図はカルク〜此間の配景  
 図と同じ大きさで描いたので郵送が出来な  
 いから君が序の時に便の者に取りに来てく  
 れ玉へ。元より之は急がない物かもしれぬ  
 が第四案の正面を少し変更した事を承知し  
 ておいて貰ひたい（学校側にて）。そして次  
 に来てくれる時は第四案に関する plan と  
 façade の青写真を呉れ玉へ」軽石は目下大  
 さと単価問合せ中その間に返事あるべし、  
 僕は日曜月曜と水曜（四月）とは不在故そ  
 のつもりであてくれ玉へ」屋根葺瓦の材料  
 種類が又これから研究問題となる。君の意  
 見如何？以上

前略東劇切符有り難う。お陰で吉野川を  
 観た。又その節は御尊母から色々物を頂  
 戴した。宜しく御礼を君から述べておい  
 てくれ玉へ。以前梅玉と共演した時の吉  
 右工門は東西芸風の相違から一寸ハツ  
 キリしなかったが此度は弟の時蔵と一緒  
 だから芸質が揃ってゐてその為め極めて  
 演劇的であつた。観劇料の高いに比し、  
 背景は皆お粗末であり、その代り多くの  
 役者に出演せしめて費用を人件費に当て  
 て社会救済をしてゐるらしき松竹の昨今  
 の方針は、僕は感心してゐる。よい事だし、  
 恐らく大谷社長あたりの気持が多くは  
 入つてゐる事であらうと想像してゐる。  
 以上、お礼迄

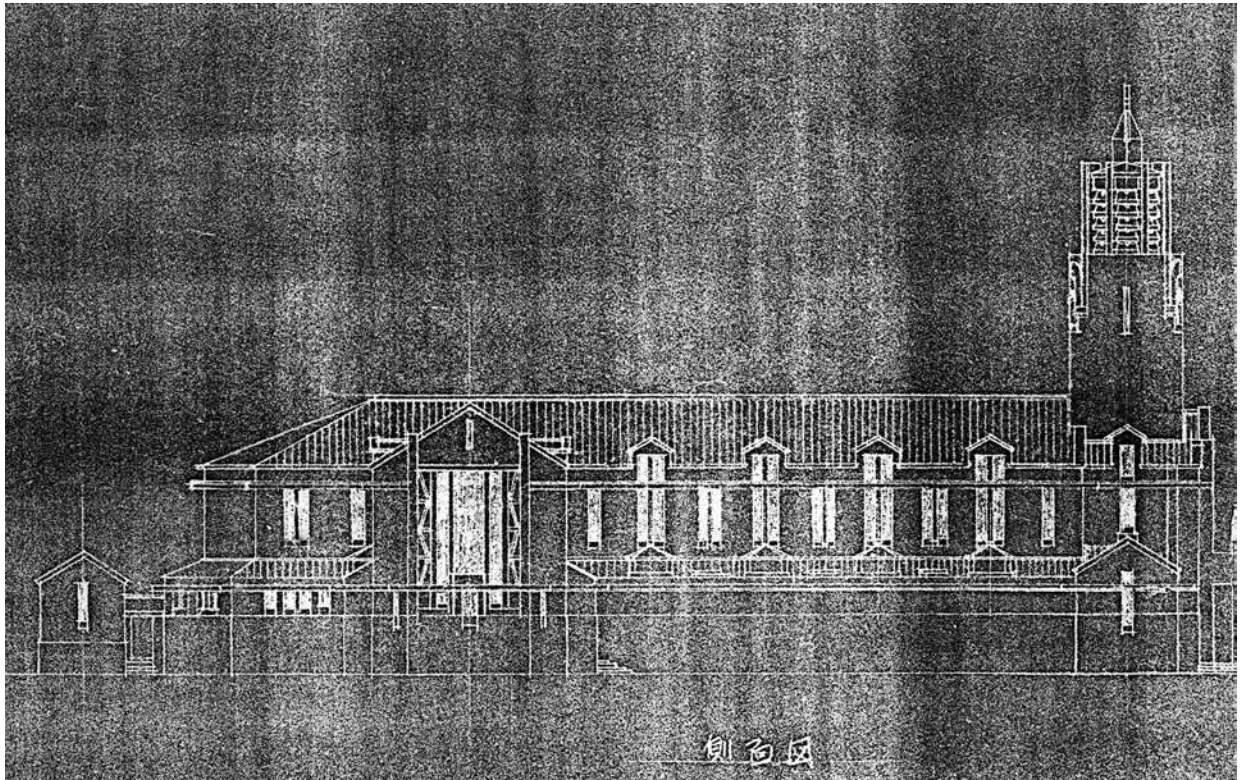
[fig.34] 葉書 (中村順平→市野昌) 3 白焼コピー

前略東劇切符有り難う。お陰で吉野川を  
 観た。又その節は御尊母から色々物を頂  
 戴した。宜しく御礼を君から述べておい  
 てくれ玉へ。以前梅玉と共演した時の吉  
 右工門は東西芸風の相違から一寸ハツ  
 キリしなかったが此度は弟の時蔵と一緒  
 だから芸質が揃ってゐてその為め極めて  
 演劇的であつた。観劇料の高いに比し、  
 背景は皆お粗末であり、その代り多くの  
 役者に出演せしめて費用を人件費に当て  
 て社会救済をしてゐるらしき松竹の昨今  
 の方針は、僕は感心してゐる。よい事だし、  
 恐らく大谷社長あたりの気持が多くは  
 入つてゐる事であらうと想像してゐる。  
 以上、お礼迄。

新年お目出たう。先は電報予告にてカブ  
 キ座切符送附あり。御影にて絶対に松の  
 内では入手できない座席を得てゆるり見  
 物が出来誠に有り難く御礼を申します。  
 イヤモ大変な大入にて入場料の高い事な  
 ど知らぬ氣に入口は混雑してゐる。建物  
 は極めて工費節約だが何しろカブキが競  
 演せられ得るといふことは意義があり、  
 吉右工門の芝居が見られた事は何より幸  
 はせなり。ドンチョウの凶案、相変わらず  
 貧困智慧のない事夥しく、然し金は相  
 当かかつてゐるだけに凶案力の乏しさを  
 残念に思ふ。有名な芝翫の八ツ橋花道で  
 笑ふ所をよくみられた多謝々々

[fig.35] 葉書 (中村順平→市野昌) 4 白焼コピー

新年お目出たう。先は電報予告にてカブ  
 キ座切符送附あり。御影にて絶対に松の  
 内では入手できない座席を得てゆるり見  
 物が出来誠に有り難く御礼を申します。  
 イヤモ大変な大入にて入場料の高い事な  
 ど知らぬ氣に入口は混雑してゐる。建物  
 は極めて工費節約だが何しろカブキが競  
 演せられ得るといふことは意義があり、  
 吉右工門の芝居が見られた事は何より幸  
 はせなり。ドンチョウの凶案、相変わらず  
 貧困智慧のない事夥しく、然し金は相  
 当かかつてゐるだけに凶案力の乏しさを  
 残念に思ふ。有名な芝翫の八ツ橋花道で  
 笑ふ所をよくみられた多謝々々。



【fig.36】 側面図 白焼コビー